昭和十六年十八月

敵文樂座人形淨瑠璃芝居

全六幕

菊弥引率興の行

定價金貳拾錢

新潟市

天下の逸品　我國粹の至藝

大阪 文樂座人形淨瑠璃芝居

全幹部引越興行

當る廿一日廿八日よりで八日間（藝題三回替り）

第二回藝題（自廿四日至廿六日三日間）

戀女房染分手綱
重の井子別れの段

義經千本櫻
椎の木よりすし屋まで

さくら時雨
大門口の段
櫻町伝住居の段

近頃河原の達引
堀川猿廻しの段

道行初音の旅路

昭和九年十二月廿一日初日
毎日午後三時半開演

御入場料

座席（御一名）金三圓八十錢
一等（御一名）金二圓八十錢
二等（御一名）金一圓八十錢
三等（御一名）金八十錢
梅席（御一名）金五十錢
菊席（御一名）

前賣券御利用願上候

◆忘年會其他種々のお集りには娯樂本位の親劇會を◆
◆お望みの御場席御注文は重寶な前賣で◆
◆當日もよい御場席が用意して御座います◆
◆好いた時間に好いた芝居を安く見る一幕見の御利用を◆

木挽町 歌舞伎座

前賣團體其他凡ての御用は前賣專用
電話京橋（自三一三一至三一三五）
電話京橋 四七〇九

歌舞伎座

表覧觀

THE KABUKIZA THEATRE

TOKYO

一階

Orchestra Stall

Row. 側 No. 番

に D 30

扉 ㊄ 等 壹

昔 十九年二月 開場 午後四時 3.80

御注意

一、此切符は御壹名當日限り有効に御座候

一、此切符は當日興行の終了迄御所持被下度候

一、此切符は一旦御入場後無斷御外出相成候時は無効と相成申候

一、一旦御入場の上は御外出に際し他人に此切符御渡し相成候共無効に御座候

一、此切符は興行休止の場合の外他の日他の番號の切符又は金錢と御取換不仕候

一、出勤俳優病氣其他の事故ある場合は番組役割に變更を生ずること可有之豫め御承知置き願上候

一、場内にての撮影は絶對にお斷り申候

御履物御預りの設備は有之候へ共又は草履の方御便利に御座

毎々格別の御引立を蒙りまして厚く御禮申上げます。

◇御客様へ御願◇

一、御席の番號を御記憶下さいますと總べてに御便利で御座います。御急用等のため御自宅にも番號を印し置き下さいますやう。

一、御帽子は椅子の下に、御携帶品は預り所へ。外套コート及び御手廻りの品は往々紛失盜難の處が御座います故御預け下さい。尚ポケット等の貴重品は御携帶下さいます樣お願ひ申上げます。

一、御觀劇中御同伴のお子供さんを別館一階託兒所でお預り致します。御安心して御預け下さい、親切に御守申上げます。

一、食堂は二、三階別館地下室にも御座いますが、なるべく一幕前に御豫約御申付けを願ひます。

一、觀客席にて食事は堅く御斷り致します。

一、醫務室の喫煙は御座いますから御遠慮なく御申し出で下さい。

一、御休憩室の設備の方は地下室で御座いまして御晴天の時は靴又は草履の方が御便利です。

一、お忘れ物は發見次第事務所に保管致しまして御座いますから直ぐお尋ね下さい。

一、一般自働車駐車場が昭和通り別館西出口に沿ひ設けられて居ります故　何卒御利用下さい。尚特に自動車註文御用のお方は萬づ承り處まで御申し付け下さいます樣。

一、お迎へ自動車の方は東側出口より御便利です。

一、案内人、係員の不都合　本館内の設備其の他一切御歸りが御心附きの點は、投書箱なり、直接事務所へ御申しきけ下さる樣御願ひ申上げます。

一、團體御觀劇には充分御相談申し上げます。御便宜御相談申し上げます。御電話にて御一報下さいますれば早速係員を差遣し、凡てに亘り御相談申し上げます。

一、場内にては寫眞撮影は特定寫眞班以外固くお斷り申し上げます。

一、汽車の時間表は萬づ承り所へ御照會下さい。

一、お座席への入口ドアは切符面に記載してありますから御記憶願ひます。

一、食堂其の他の御祝儀は一切お氣遣ひなき樣呉々もお願ひ申し上げます。

一、西側休憩室にて公衆電話が御座いますから御利用を願ひ上げます。

更にお氣附の點は御遠慮なく御注意願ひ上げます。

松竹興行株式會社

歌舞伎座

電話京橋(56)自三一三一・至三一三五

文樂人形淨瑠璃擁護會規約

第一條　本會は文樂座人形浮瑠璃擁護會と稱す

第二條　本會は文樂座人形淨瑠璃及斯道を擁護するを目的とす

第三條　本會の趣意を贊成するものを以て會員とす

第四條　本會の趣意に贊成し金壹百圓以上を寄附したるものを特別會員とす

第五條　本會に左の役員を置く

會長一名　副會長一名

理事十名　評議員若干名

第六條　評議員は總會に於て選擧し會長副會長及理事は評議員會に於て選擧す

第七條　役員の任期は三ヶ年とす

第八條　本會の經費は會費及寄附金を以て之に充つ

第九條　本會の會費は年額金六圓とす

第十條　本會は右會費六圓の中にて年一回理事會に於て定めたる日程の觀覽券一枚を配付するものとす

第十一條　總會は一ヶ年に一回開會す

但し理事會に於て必要と認むる場合は臨時會を開く事あるべし

文樂人形淨瑠璃擁護會理事

伊原青々園　山崎紫紅
石川安部豐
近松秋江　佐藤義亮
和田英作　結城禮一郎
内藤伸　三宅周太郎

事務所

東京市小石川區原町三十一

文樂人形淨瑠璃擁護會

振替口座東京四九八一一番

太夫・三味線連名

竹本小春太夫
野澤吉左
豐竹つばめ太夫
野澤重造
竹本相生太夫
豐澤廣助
竹本大隅太夫
鶴澤道八
竹本錣太夫
豐澤新左衞門
豐竹古靱太夫
鶴澤清六
竹本土佐太夫
野澤吉兵衞
竹本津太夫
鶴澤綱造
豐竹駒太夫
竹澤團六

人形遣連名

吉田榮三
吉田文五郎
吉田玉次郎
吉田玉七
桐竹政龜
吉田小兵吉
吉田玉松
桐竹紋十郎
吉田玉幸
吉田扇太郎
桐竹門造
吉田玉市
吉田文作
桐竹紋太郎
吉田榮之助
吉田玉德

吉田瓢壽呂
吉田兵次
吉田玉米
吉田萬二郎
吉田利男
吉田文之助
吉田多三郎
吉田榮三郎
桐竹紋司
吉田藤一
吉田文二郎
吉田玉昇
吉田榮之助
吉田文枝
吉田玉男
桐竹紋昇
はやし小川彌三郎

重の井子別れの段

重の井　豊竹つばめ太夫
三吉　竹本小春太夫
彌三左衛門　竹本相生太夫
宰領　豊竹宮太夫
　　鶴澤重造

人形

重の井　桐竹紋十郎
馬方三吉　桐竹紋司
本田彌三左衛門　桐竹門造
腰元　桐竹紋太郎
宰領　吉田玉德
宰領　吉田榮三郎

戀女房染分手綱
重の井子別れの段

此浄瑠璃は寛暦元年二月竹本座に掛けられたのが初めて全十三段から成立てゐます。此段は十段目で双六の段ですが、重の井子別れで通つて居ります。作者は吉田冠子、三好松洛で有ります。此曲は大近松の「待宵小室節」（丹波與作）を改作したものであります。

◇床本

へ傍の衆にはやされて、稚心の姫君。かうおもしろい東とは、今迄おれは知らなんだ、サア〳〵行かう早やいかう。ヤアござらうとおつしやるか、そりやめでたいわ〳〵、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へて立さはぐ。お乳の人は勇みをなし。そんならま一度、大殿様お袋様とお別盃、これも馬子殿おかげじや、でかいた〳〵、そちには禮いふ、饗美やる、そこに待ちや、とさざめき渡り、奥にお供し入にけり。馬士はつひに見ぬ金の間をうそ〳〵と、覗き廻れば莚の外、踏みもならはぬ備後表。エ、此座敷は、ぎやうにすべつて歩かれぬ、大名の家よりも、こつちの内がけつこでござると、獨言して居たりけり。お乳の人は大高に、菓子さま〳〵文庫にもり入れ。どれ〳〵三吉、そこにか、そちは健氣者ぢや、道中双六お目にかけ、それ故に姫君様、お江戸へござろと御意なさるる、お上にも御機嫌、是は御前のお菓子

有難ういたゞきや、お錢三筋、買ひたい物買ひやや、殊にそちは通しじやげな、道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はふと云や、見ればみるほどよい子ぢやに、馬士させる親の身は、よく〳〵であらうと、いふ懇の詞のすゑ。三吉つく〳〵聞きすまし。由留木殿の御内お乳の人重の井様とはお前か、そんならおれが母様と、抱き付けば。ア、こは慮外な、儕が母様とは、馬士の子は持たぬ、ともぎ放せば、武者ぶり付き、引退くれば縋り付き、何のない事申しませう、わしが親はお前の昔の連合、此御家中にて番頭伊達の與作、其子は私、こな様の腹から出た、與之助はわしじやわいの、父様は殿様のお氣にちがふて、國をお出でなされたは、小さい時で覺えねど、沓掛の乳母が、話には、母様も離別とやらで、殿様に御奉公、こなたは乳母が養育し、父さんに逢はせとう思へ共、甲斐もない、母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、重の井さまと尋ねよと、懇にをしへて、乳母はおれが五つの年、久しう痰を患うて、鳥羽の祭の餅が咽につまつたやら、つひ死んでのけました、乳母が子の一平は、父様を尋ねに行き、在所の衆が養ふて、漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする、コレ、守袋を見やしやんせ、何の嘘を申しませう、お前の子に紛れない、外に望みは何にもない、父様を尋ね出も、一日なりとも三人一所に居て下され、見事沓も打ちまする、此草鞋もわしが作つた、晝は馬を追ふて、夜は沓打ち、草鞋つくり、父様母様養ひませう、父様と一つに居て下され、拜みまする母様と、取つき抱き付き泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我子の與之助、守袋も覺へあり、飛び付いて懷に抱き入れたく氣はせけども、アツア大事の御奉公、養い君のお名の瑾、偽はつて呵らふか、イヤ可愛げにさうもなるまい、マアちよつと抱きたい、ア、どうせうと、百千色の憂涙、二つの目にはたもちかね、むせび沈みて居たりしが、いや〳〵我子ながらもさかしい者、偽はつても眞とせず、母を心のきたない者と、蔑しまるゝも情なし、譯を語つて合點させ、恥しめ

てかへさんものと、涙拭ふて氣をしづめ。爰へ來い與之助、と引寄せて、兩手を取り、扨も大きうなりやつたの、とても成人せうならば、侍らしうなぜ尋常にも育てぬぞ、顏の道具手足まで、母はかうは產み付けぬ、美しい黑髮を此やうに剃りさげて、手足は山のこけ猿じや、ほんに氏より育ちぞと、又さめ〴〵と泣きけるが、コレ物をよう合點しや、腹から產んだは產んだけれも、今では子でも母でもない、淺ましう成下つたを、嫌ふていふではさら〳〵ない、爰の譯をよう聞きや、母はもと御前樣の御奉公人、與作殿は奥家老の御子息、たがひに若木の戀風に、すれつもつれつ、一夜が二夜と度重なり、そなたを懷胎、此事お上へ聞へては、父も母も御成敗にあふ故に、病氣と僞り乳母が所で產落し、育て貰ふ其中に、情なや八平次といふ者の所爲にて、父樣は御追放、此母が悋氣から不義の事あらはれ、既に御成敗に極まりしを、わしが爲には父樣、そなたの爲には祖父樣の定之進樣、勿體ないわしにかはつての御切腹、お姫樣の乳ばなれといひ立て、殿樣のお慈悲にて、姫君のお乳の人、首尾さへよければそなたも今、奥家老の御子息、二番と下座にさがらぬ人、其時母も一所に退けば、もつとも夫婦の道は立てども、身に餘つたお家の御恩、誰何時の世に報ぜん、殘つて恩を報じて呉れと、父樣の斷り故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、飽かぬ離別をしたわいの、男の子は幼うても、御勘氣の末氣づかひな、與作の子とばしいはしやんな、サア早う御門へ出や、ア、いかなる因果な生れ性、現在我子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乘つたとて、是が何になることゝ、聲を忍びに泣くばかり。子は生れつき賢くて、聞きわけある程猶泣入り。悲しい話を聞きました、さりながら、常に乳母が申しは、姫君樣と私とは、乳兄妹の事なれば、母樣にさへ逢ふたらば、父樣も出世なさる由、御訴訟なされてくだされかしと、いへばちやつと口をおさへ。アレ〴〵勿體ない、其乳兄妹は云はぬ事、姫君樣の關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも

姫ごぜは大事の物、先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄妹にあるなどと、どう妨げにならうやら、蟻の穴から堤も崩る、輕いやうでも重い事、ひそ〳〵いふて人も聞く、先づ早う出てくれと、泣く〳〵いへば、三吉。ア、母様、あんまり遠慮過ぎました、先づ云ふて見て下され。

また云をるか、聞き分けない、夫の事我子の事、母に如才があるものか、合點の悪い聞分けないと、制する中に奥よりも。お乳の人とこにぞ、御前から召しますと呼ばはれば、アレ聞きや、人が來る出てたもと、手を取つて引出す。不憫や三吉しく〳〵涙頬冠りして目をかくし、沓見まつべて腰につけ、見すぼらし氣な後影。コリヤま一度こちらむきや、山川で怪我しやんな、雨風雪ふり夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩らはぬ樣にしてたも、毒な物くはずに腹痳疹の用心しや、可愛の形やいた〳〵しや、千三百石の代取が、何の罰ぞ咎めぞと、式臺の段階子に、身を投げ伏して歎きしが、懐中の有合ふ一歩十三、申紗に包み、是嗜みに持つて居やと、涙ながらに渡さるゝ。三吉見かへり恨めし氣に。母でも子でもないならば、病うと死なうと要らぬお構ひ、其一歩もいらぬ、馬士こそすれ伊達の與作が惣領じや、母様でもない、他人に金貰ふ筈がない、ェ、胴慾な母様厲えて居さつしやれと、わつと泣き出す其有樣。母は、魂消えいりて。養君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、何のやらうぞ、奉公の身の淺ましやと、もだへ焦れて歎きける。時に奥口ざざめいて、早御立と姫君の、御輿かき上げ行列立ち、お乳の人の乗物を、ひら付にこそかき寄せけれ。お乳はさあらぬ顔付して、姫君のお伽に、最前の馬士を此の乗物に引つけ、お慰みにうたはしや。畏つたと宰領ども。コリヤそこな、自然薯め諷ひおらうとぎごつなく、ヤアこいつはほへをるか、何じやこりやいま〳〵しと、握拳二つ三つ、いたどきながら泣聲に、坂は照る〳〵、鈴鹿はくもる、土山間の、間の土山雨が降る。降る雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ。

義經千本櫻

椎の木より　小金吾討死の段

口　豊竹辰太夫
豊澤團伊三
奥　竹本大隅太夫
鶴澤道八

義經千本櫻

椎の木より壽し屋まで

淨瑠璃と云へば千本櫻と云はれる位世界的に知られてゐる名作で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三者合作になる全五段ものであります。延享四年十一月竹本座に書下されて以來連綿と打つづけられた夢幻劇で眞に代表的作品であります。

椎の木の段

三芳野は丹後武藝に大和路や、わけて名高き金峰山藏王彌勒の御寶物御開帳とて、野も山も賑はふ道の傍に茶店かまへて出花汲む、青前垂の入端は女房盛の器量よし、五つか六つの男の子傍に附添ふかゝ樣といふで花香もさめにけれ、枯殘る身はいとゞ猶枝おりや若葉の內侍若君は主馬の小金吾武里が嵯峨を遁れて惟盛の、もしや高野と心ざし、旅の用意の小風呂敷脊に忍海吉野なる下市村に着けるがゝ若君六代痛疾になやみ賜へば幸の茶店、暫く床几へお休と、內侍を誘ひ其身も脊負し包みをおろし、お茶と指圖にあい〳〵とあいそこぼれて差出す、內侍はつくづく見賜ひ、こりやこなたも子持よの、自らも連合の忘れ筐を伴ひしに道より惱みて貯へし藥を殘らず飲きらし、俄の難儀子持つた者は相身互の嗜みあらば所望仕度

人形

若葉の内侍　吉田文作
主馬小金吾　吉田玉幸
六代君　吉田文枝
女房小仙　吉田多三郎
悴善太　桐竹紋昇
いがみの權太　吉田榮三
猪熊大之進　吉田玉市
親彌左衞門　桐竹政亀

しと、仰に女房、それはまあいかい御難儀、わたしが子は腹痛一つおこしませねば何の用意もござりませぬ、ハテそれは氣の毒や、イヤ申しほんに、それ〳〵幸い此村の寺の門前に洞川の陀羅助を請賣る人がござりますれば、お供の前髪様つい一走り、イヤ〳〵身共は當所不案内、太儀ながら其方調べてくれまいか、ヲヽそれもお安い事わたしが調べて來て上ませふ、善太留守仕や、但しは行か、おれもとしたふ子をつれて、器量よければ心まで尊い寺の門前へ藥を買に急ぎ行く。

ハテ心よい女中やと内侍は見やり、コレ六代、爰に大分木の實があるが、拾ふて遊ぶ氣はないか、金吾が拾ふが大事ないかと、いさめの詞に引立られ、おれも拾をと、若君の病もわやく半分の起立賜へば内侍も倶々、サア〳〵ひろを、イヤ拙者めがと、小金吾が廿に近い大前髪おとなけないも若君の機嫌取る、かやとちの實を拾ひ集むる折からに若き男の草臥足、これも旅立風呂敷づゝみ、脊負てぶら〳〵茶見世を見付、どりや休んで一ぷくと包みをどつかり床几におろし、御免なりませ、火を一つと煙草吸付け、こりや皆様方は開帳參りでござりますか、わゞ様は道草か、わしらが在所の子供と違ひ御綺麗な生れ付きやと譽ても咄し

しかけても、心置く身はそこ〳〵に詞數なく拾ひ居る、暫く休んで彼男、コレ〳〵其落た木の實は蟲入で見かけがよふても皆ほがら、木にあるをお取りなされといふに金吾は、こな男何をいふ二丈餘りの高木かけ上るけづめは持ぬ、サそれを心安ふ取樣がござります、ソリヤどうして、さらば鍛練お目にかけふと小石拾て打礫、枝に當つてばら〳〵〳〵、若君悅びなやみも忘れ、小金吾拾への御機嫌に、內侍も嬉しく、チヽよい事してもらつた過分〳〵と一禮も冥加に餘るとしらざりし旅の男は自慢顏、何と手の內御覽じたか、まそつと打て進せたいが、遠道かゝへお伽申ても居られず、我等は參ると包みを脊負ひ、御緣あらば重ねてと、いふて其場を行過ぎる、小金吾木の實を拾ひ仕廻ひ、サア是で堪忍なされ、扨々今の男は氣轉者と、見やる床几の風呂敷包、同じ色でもどこやらが違ふた樣なと走り寄り內改めれば覺なき、しかも是は張皮籠、こちは異類の藤ごほり、扨は木の實に氣を奪はせ取交へうせたか、但しは籠相か、何にもせよ追かけて取返さんとかけ出す、所へ向ふよりあたふた戻る以前の男、籠相致した御免御免といひつゝ包み指出し、日くれもちかし心はせく、同じ色の風呂敷故重い輕いに氣も付ず取ちがへた籠相、道にてふつと心付き取てかへしてお詫言、まつぴら御免くだされと、顏に似合はぬ手するたいほう、小金吾は胸落付き、籠相とあれば言分もおかないが萬一紛失の物あると赦さぬが合點か、なにが扨相違あらば臺座の別れ御存分になされませ、ムウ其一言なら疑に及ばねども中改めて請取んと、包をひらき改め見れば相違もなし實籠相に極つた、申分なし、其方の荷物も持ておいきやれと、床几に殘る風呂敷包渡せば受取り不思議顏、此中ぐくりのほどけたは、イヤそれは最前かはつた樣には思へ共もしやとちよつと見たばかりといふ間にひらく張皮籠引ちらけて

袷の袖、浴衣の間をさがし見て悔り仰天、こり打ふるひこりやどふじや、コリヤないは、ないは〳〵ときよろ〳〵目玉、何がない何見へぬと傍も氣のどく目をくばれば、兼て工みのいがみの男、腕まくりして、コレ前髪殿此皮籠の中に人に頼まれて高野へ上る祠堂金廿兩入置た、コリヤくすねたなくすねたろサア出した〳〵、サア出しやいのと取つても付かぬ難題に、小金吾むつと反打かけ、こいつ下郎奴、武士に向つて何がなんと、今一言言て見よと、きつ相かはれどびく共せず、盗人たけ〳〵しいと其高ゆすりくはぬ〳〵赤鰯をひねりかけ、おどして此場をぬけるのか、ほううまいそんな事、春永になされわづか廿兩で首綱のかゝらぬ中四の五のいはずと出した〳〵と、もがりいがみのねだり者、モウ堪忍がと拔かけしが、お一方の姿を見て、じつとこたへて胸なで下し、コレサ若い人、そりや其元の覺へ違ひ見らるゝ通り足弱をお供したれば、假令何萬兩落ちつて有ても目をかける所存はなし、とくとそつちを吟味召されと言せも果ず、コレ其足弱連たが盗みする付目じや、よもやと思はせしてやるが當世のはやり物何萬兩は入らぬたつた廿兩、スリヤどふしても身が盗んだとな、ハテしれた事、ムウして其盗んだ證據は、コレ此皮籠の中紐、なぜといたあり樣の荷物に紛失があると赦さぬといふたでないか、理詰じやぞや出しやいの〳〵とせり詰られて小金吾も、もふ是までと拔放す、内侍はあはてて抱きとめ、尤じや、短氣な事を仕やつては、わしも此子も俱に難儀無念に有らふと堪忍してあの者のいふ樣に了簡付てやつてたも、足弱つれたを災難と思ひ胸をしづめてたもいのと涙にくれてのたまふにぞ血氣にはやる小金吾も見るに忍びず、世が代の時でござらふならずたゝにためしてもあきたらぬやつなれ共、何をいふても芽の穂にもおちる身の上御意の通りに致しましよ、ヘエ、

口惜ふでござりまするど、こなたは大事の二方をお供の身なれば無念をこたへ奥齒かむ程付あがり廿兩といふ金あたたまつておいて其頰何じや、ホウこはいは〳〵此赤鰯で切るか、此目でおどすか前髪を一筋づゝ拔だよ、但しもふ金はふけらしたか、連のめろからせんさくと弱みへかゝるを首筋つかんで引戻し、用意の路金いふ程出してにらみ付け、大切なお方をお供した故衒取る廿兩持てうせいと打付くれば、衒のならひ金見ると目に佛なく手ばしこく拾ひあつめて耳讀み揃へ、テモおそろしい此金を那智若衆めにすつての事ひじり取らりよと致したとへらず口、其頤をと立寄る金吾を內侍はおさへ、事ない中と若君引連れ立出賜へば是非もなく後に引添ひ小金吾も無念をこたへ上市の宿ある方へと急ぎ行く。たとへ百度にらまれても一度が一歩に付やせまい、うまい仕事といがみの權太、金懐ろに押入て盆屋へ急ぐ向ふへずつと茶屋の女房が立ふさがり、コレ權太殿こりやどこへ、ホ小せんかわりや店明けてどこへいた、わしや旅人のお頼みで坂本へ藥を買に、チそりやよい手筈、われが居たら又邪魔しやうに、はづしていたでまし〳〵といふ胸ぐらを取て引すへ、こなたに衒さす氣ではづしては居ぬぞや、最前戻りかゝつた所にわつぱさつぱ指で出たら衒の正銘現はれ、どんな事にならふもしれぬと、あの松かげから聞て居た、エ、こなさんは恐ろしい工みする人じや、姿は虎共心は生ぬと親御は鈎瓶鮓屋の彌助の彌左衛門樣と言ふて此村で口も利くお方、見限られ勘當同前御所の町に居た時こそ道も隔たれ後の月から同じ此下市に住んでも嫁か孫かとお近付にもならぬはいの、皆こな樣の心から、いがみの權にきぬきせて衒の權といはふぞや、此善太郎は可愛ないか、博奕のもとでが入るならば此子やわしを賣つてなりと、重ねてやめて下さんせ、何の因果で其樣な恐ろしい氣にならしやつた

と、取付歎けば突飛し、ヤァ引さかれめが又してもよまい言、おれが盗み衒りの根元は皆うぬからおこつた事、おこりや大それた事聞かねばならぬ、そりや又どふして、どふしてとは覺へがあらふ、おりや十五の年元腹して、親父のいひ付で御所の町へ鮏商ひ、隱し女の中に儕が振袖、見込だが鯱鱇ほど寢入る佛師達の贋くりを盗出し店の溜り得意先、身代半分仕迫ふてやつなナ聞へたか、所で親父がほり出した無理なわろの、其時因果とこのがきが腹にあつて親方はねだる年貢米を盗んで立銀、其尻が來て首が飛ぶのを庄屋のあほうが年賦にして毎日の催促、其金濟そで博奕にかゝり出世して小ゆすり衒、此中も親父の所の家尻を切つて見たれど妹のお里めと内の男めが夜通しの鼻聲でとんとまんが損ねた、又けふのまんのよさ、此勢ひに母の鼻毛をゆすりがけ、二三貫目ゑじめてくる、酒買ふて待ておれ、善太よ日の暮から寢おんな夜通しせねはおれが商賣は讓られぬと言ひつゝ立ば女房取付き、まだ此上に親御の物までだまし取とは勿體ない、ヤァ内へ戻つて下されとすかれど聞かず刎飛ばすを、コリャやい善太よ留てくれと母の敎へに利口者、とゝ樣内へサァござれと手にまとひ付く、蔦かづら子が後追へば惡者は小手しばりとてうたてがる、しかも血脉の糸繩で、きぴたわるい出なをそと鬼でも子には引さるゝ、テモ扨もつめたいほでじやと手を引て女房諸共立歸る。

小金吾討死の段

夕陽西へ入る折から、主馬の小金吾武里は上市村にて朝方が追手の人數に取まかれ、數ヶ所の疵を負ながら、内侍若君御供申し、一先づ都へ立歸るを後につゞいて數百人遁さぬやらぬと追かけたり、手疵は貧共氣は鐵石の武里が死物狂ひと思ひの刄、爰に三人かしこに七人、ばらり〳〵となぎ倒し、其身は秋の花紅葉、敵は木の葉の

そのあとへ追手の大將猪熊大之進おくればせにかけ來り、ヤア死損いめいづくへ行く、先頃嵯峨の奥にて取遁し、主人朝方の御機嫌以ての外、すごゝ〳〵館に歸られず、庵坊主めに白狀させ付け廻したる此街道、サア惟盛の御臺若君を渡し腹かつさばけと呼はつたり、手負は流るゝ血汐をぐつと一飲息をつき、主馬の判官が悴小金吾武里息あるうちはいつかなく、ヲ其一言が絶命と踊り上つて討つ太刀をてうとうけとめ、はつしとはね、ひらりと見せてはくるりとはづし、手練を盡せどさすがは手負、内侍若君あぶ〳〵ひやく、小石を拾ひ砂打ちつけ、及び越なる加勢も念力、手ごはく見ゆる猪熊が眼に入つて目あてはくらやみ、透間に切込むだんびらに、眉間をわられて頭轉倒のつかゝるを下よりも突く、きつさきはあばら骨、金吾ものつけにそりかへる、あなたが起れば石礫、猪熊切れ小金吾も共に深手の四苦八苦、修羅の街ぞあやふけれ、忠義の天成小金吾がなんなく相手を取て押へ、ぐつと突込むとゞめの刃、サア仕負せし嬉しやと思ふ心のたるみにや、うんと其身も倒れ伏す。ノウ悲しやと内侍若君いたはりかゝへ抱おこし、コレのふ金吾〳〵、氣をはつきりと持てたも、そなたが死で自らや此子は何となるものぞ、情けなやかなしやなと、泣入賜ふ御聲に通つて手負は顔を上げ、コレ内侍様六代様、あきらめて下さりませ、心はやだけにはやれどもふ叶はぬ、我君惟盛様は兼て御出家のお望、熊野浦にて逢奉りしと言ふ者ある故、高野山へと心ざし、お二方をお供したけれど、中々此手では一足も行れず、コレ若君様よふお聞き遊ばせや、御臺様を伴ひかみやの宿といふ所に内侍様を殘し、お前は人を頼んで山へ登り、とゝ様のお名は言はれぬ、今道心の御出家と尋ねてお逢遊ばせ、西も東も敵の中、平家の御公達と悟られぬ様お命めでたう御成人の後憚りながら金吾めが事思し

召し出されなば、一滴の水、一枝の花、それが則ち冥途へ御知行、御成長待つております、お名殘りおしいお別れと、いふもせつなき息づかひ、六代君は取すがり死でくれな小金吾、そちが死ぬるとと、様にあふ事がならぬはと、泣入賜へば内侍はせき上げ、アレ聞いてたも子心でもそなた一人を力にする、惟盛様に逢までは死まいぞ〳〵と、なぜ思ふてはたもらぬ、御一門殘らず亡び廣い世界を敵に持ち、いつまでながらへ居られふぞ、倶に殺してたもいのと、歎き賜へばことはりと手負はいとゞ涙にくれ、先君小松の重盛様は日本の聖人、若君は其孫君、諸神諸佛の惠のない事はござりますまい、末たのみに思し召て必ず短氣をお出しなされな、あれ〳〵向ふへ提燈の灯かけ、又も追手の來るもしれず、若君伴ひ此場を早く早く、イヤ〳〵深手のそなたを見捨置ていづくを當に行くものぞ、死ば倶にと、座し賜へば、ヘエ、ふがひない六代様は大事ないか、此手で死る金吾めでござりませぬ、聞き入なければ直に切腹、コレ待てたもそれ程にまで思やるなら、成程先へ落ませう、かならず死でたもるなや、お氣づかひ遊ばすな運にかなひ後より參ろ、かならず待つ居るぞやといふ間に近づく提燈の灯かけに恐れて是非なくも若君つれて落賜ふ御心根ぞいたはしき、手負は御後見送り〳〵、死ぬと申せしは僞り、三千世界の運借ても何の此手で生きられませふ、内侍様六代様是が此世のお別れでございますと、思ふ心もだんまつま知死期も六つの暮、過て朝の露ときへにける。程なく來る提燈は此村の五人組、何やらざは〳〵はなし合、山坂のわかれ途に庄屋作が立留り、コレ彌助の彌左衞門殿貴様は鮓商賣ゆへ念押上におしかける、今いひ付けた鎌倉の侍は聞き及んだけじ、何やらこなたの耳をねづつてはげる程言付たら、畏まつた〳〵とめつたむせふに請合たが、何と覺のある事かや、ハテ

知れた事こなた衆も常からおれが性根を知らぬか、血を分けた仲でも見限つたら門端も踏さぬ彌左衛門、膝ぶしが碎けても畏まつたらしびりも切らさぬ、したがあとからの言ひ付がもつけ、嵯峨の奥から逃て來た子を連た女と大前髪、此村へ入込んだと追手からの知らせ、所でけじ殿がねぶりかけて捕へたら褒美とある、こりや又格別よい仕事、皆も油斷をせまいぞやテそれ〳〵こんな時こそこなたの息子のいがみの權太を頼んでおかふと五人組、山道行けば彌左衛門坂へ折しも行先の手負にばつたり行當り、はつと飛退氣味悪ながら提燈振上げそろ〳〵立寄り、テモむごたらしう切つたは〳〵旅人そふなが追剝の所爲ならば丸裸にしそふなもの、路銀を當に悪者の所爲かと、悪い子を持つ親の身は案じ返して、コレ〳〵手負と呼も答もなきからに、扨は最早息絶たかいとしやいづくの人なるぞ、見ればふけた角前髪、袖ふり合も他生の縁、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と回向してとかく浮世は老少不定、哀を見るも佛の異見、人はいがまず眞直に後生の種が大事ぞと思ひつゞけて行過せしが何思ひけん立留り、立つつ置いつの俄の思案そろ〳〵と立戻り、傍見廻し〳〵てぬき身を拾ひ取るより早く死首をばつしと打落し、提燈吹消し首引さげ忝いと彌左衛門すぐなる道も横飛に我家をさして〳〵立歸る

壽し屋の段

歌三下り　春は來ども花咲かす、娘が漬けた鮓なれば、馴れがよかろと買ひに來る。風味も吉野下市に、賣弘めたる所の名物釣瓶鮓屋の彌左衛門、留守の内にも商賣に、拔目も内儀が早漬けに娘お里が肩襷、裾に前垂ほや〳〵と、愛に愛持つ鮎の鮓、押へてしめてなれさする、味い盛りの振袖が、釣瓶鮓とは物らしゝ、締木に栓を打ち込んで桶片付けて申し母様、昨日とゝ様の云はしやるには翌の晩には内の彌助と祝言さす程に、世間晴れて女夫になれとお仰有たが、日がくれてもお歸りないは嘘かいな。オ、あの云やることはいの、何の嘘であらうぞ器量の

壽し屋の段

切　竹本津太夫

鶴澤綱造

人形

娘　お里　吉田文五郎

彌左衞門女房　吉田玉七

下男彌助　吉田光之助

親　彌左衞門　桐竹政亀

梶原平三景時　桐竹門造

若葉の内侍　吉田文作

六代君　吉田文枝

權太　吉田榮三

よいを見込みに、熊野參りから連れて戻つて、氣も心も知ると彌助と言ふ我名を讓り、主は彌左衞門と改めて、内の事任せて置しやるはそなたと娶す豫ての心、今日は俄に役所から、親父殿を呼びに來て　思はぬひま入り、迎ひにやろにも人は無し、サイナア折惡う彌助殿も方々から鮓の　跳　仕込みの桶がたるまいと、明桶とりにいかれました、もう戻らるゝでござんしよと、噂半へ明桶荷ひ、戻る男の取なりも、利口で伊達で、色も香も、知る人ぞ知る優男、娘が好いた厚鬢に、冠着せても憎からず、内へ入る間も待兼ねてお里は嬉しく、アレ彌助様の戻らんした、まち兼た遲かつた、もしやどこぞへ寄つてかと、氣が廻つた案じたと、女房顔していふて見る流石鮓屋の娘とて、早い馴とぞ見えにける、母はにこ〳〵笑ひを呑み、彌助殿氣にかけて下さんな、此の吉野口の辨財天の敎へによつて、夫を神とも佛とも、頂いて居よとある天女の掟、そのかはり程悋氣も深い、又ありやうは親の孫瓜のつるにではござらぬと云ひくろむれば、これはまァかへつて迷惑、段々お世話の上、大切なお娘御迄下され、お禮の申樣もござりませぬ。去りながら兎角お前には彌助殿〳〵と殿付をなされて、さりとては氣の毒、やつぱり彌助どうせい、かうせいとお心安うナ申し。イヤ〳〵それは赦して下され。そりやなぜでござります。さればいの、彌助と云ふ名はこれまで連

合の呼名、殿付せずにどうせい、かうせいとは、勿體なうて云ひ憎い、言ひ馴れた通り殿付さして下されと實に夫をば大切に、思ふ掟を幸ひに娘へ之を聞けがしの、母の慈悲とぞ聞えける、お里彌助は明桶を、板間に竝べて居る所へ、此家の惣領いがみの權太、門口より乙聲で、母者人〳〵と、云ひつつ入ればお里は悔り、又兄樣がようお出ともみ手する、きよと〳〵しい其面なんぢや、よう來たが悔りか、わりや彌助と味い事して居るさうなが、コリヤ彌助もよう聞け、今追ひ出されて居ても竈の下の灰までおれがもの、今日は親父の毛蟲が役所へいたと聞いたによつて、ちと母者人に云ふ事があつて來た。二人ながら奥へうせうと睨み廻はされうち〳〵と、これにというて立つ彌助、娘も後に引添うて一間へこそは入にけれ。跡に母親溜息つき、コリヤ又留守を考へ無心に來たか、性懲もないわんぱく者、其おのれが心から嫁子があつても足踏一つさす事ならぬ、聞きや此村へ來てゐるぢなが、互に知らねばすれ合ふても、嫁姑のあきめくら、眼つづれと人々に、云はれるが面白ない、ヘエ、不孝者めと目に角を立かはつたる、機嫌にぐんにやり、直ぐではいかぬといがみの權、思案しかへて申し母者人今晩參つたは、無心ではござりませぬ。お暇乞に參りましたソリヤ何んで。私は遠い所へ參ります程に、親父樣もお前にも、隨分おまめで〳〵、としほれかければ母は驚き、遠い所とはそりやどこへ、どうした譯で何にしに行くと。根問ひは親の欺され小口。サアしてやつたと、目をしば叩き、親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、ついに人の物箸片し、いがんだ事もいたしませぬに、不幸の罰か夜前私は、大盗人にあひました。サア其中に代官所へ上る、年貢銀三貫目と言ふ物盗に取られ言譯なく、仕樣もなく、お仕置にあふよりはと、覺悟極めでをります。情ない目に合ひましたと、廣口袖をば顔にあてしやくり上げても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の緣へ、とゞかぬ舌ぞ恨めしき。甘い中にもわけて母親、實と思ひとも目をすり、鬼神に横道なしと年貢の銀を盗まれ死なうと覺悟はま

た出かした、災難に合ふも親の罰、よう思ひ知れよ。アイ〳〵思ひ知つてはおりますけれど、何うで死なねばなりますまい。コリヤヤイ、あい〳〵。常のおのれが根性故、これもかたりかしらね共、しやうぶ分けにと思ふた銀、親父殿に隱してやろ、これでほつとり根性直せと、そろそろ戸棚へ子の影で、親も盗みをする母の、甘い錠さへ明け兼ねる、つい雁首でこち〳〵がよござりますと仕馴れはる、おのが手業を教ふる不孝、親は我子が可愛さに、地獄の種の三貫目、後をくろめて持つて出で何ぞに包んでやりたいがと、限りないほど甘い親、うまいわろぢやといがみの權、鮓の明桶よい入物、これへこれへと親子して、銀をつけたるこがね鮓、蓋しめ栓しめサァよいわ、これで目立ぬさけていねと、親子が工合の最中へ、苦い親父彌左衛門。これも疵持足の裏、あたふたとして門口を、戻つた明けいとうち叩く、無南三親父と内には轉倒、うろたへ廻り其桶を、こゝへ〳〵と明桶と、ともに竝らべて親子はひそ〳〵、奥と口とへ引別れ、息を詰てぞ入にける。なぜ明けぬ明けぬと頻にたゝけば奥より彌助、走り出て戸を明ける。内入悪しく邊を見廻し、コリヤ又どいつも寢てをるか、云つけた鮓共は、仕込んであるかと鮓桶をさけたり明けたりぐわつた〳〵、コリヤ思ふほど仕事が出來ぬ。女房やお里めはなにしてをるぞ、イヤ只今奥へ呼びませうと行く彌助を引とゞめ、内外見廻し表をしめ上座へ直し、手をつかへ、君の親御小松の内府重盛公の、御恩をうけたる某、何卒御子惟盛卿の御行衛を、と思ふ折から熊野浦にて出合、御月代をすゝめ此家へお供申たれ共、人目を憚かる下部の奉公、餘りと申せば勿體なさ女房ばかりに仔細を語り、今宵祝言と申すも心は娘をお宮仕へ、彌助々々と賤しき我名をお讓り申したも、彌助くるとと言ふ文字の緣起、人は知らじと存ぜしに、今日鎌倉より梶原平三景時來つて、惟盛卿を匿ひありと、退引きせぬ詮議、烏を鷲と云ひ云けては歸れ共、邪智深い梶原、もしや吟味にまゐるも知れずと、心巧みはいたして置けども、油斷は怪我のもと、型からでも我隱居上市

村へお越あれと、申上れば惟盛卿、父重盛の厚恩を請たる者幾萬人、數限りなき其の中に、おことが樣な者あらうか、昔はいかなる者なるぞと尋ね給へば、私めは平家御代盛りの折から、唐土硫黄山へ祠堂金お渡しなさるゝ時、おんどの瀬戸にて三千兩の金盜みとられ、役目の難儀切腹には及ばんところ、有難いは重盛樣、日本の金唐土へ渡すこそ、日の本の盜賊と、御身の上を悔み給ひ、重ねてなんの祟もなく、お暇を下され親里へ、立歸つて由緒ある鮓商賣今日を安樂に暮せども、悖權太郎めが盜み騙り、殺生の報いぞと、思ひ知つたる身の懺悔、お恥しうござりますと、語るにつけて惟盛も、榮華の昔父の事、思ひ出され御膝に、落る涙ぞ勞はしき、娘お里は今宵待つ月の桂の殿もふけ、寢道具抱へて立出れば、主はつと泣目を隱し、コリヤ彌助、今言ひ聞かした通り、上市村へ行く事を、必らず〳〵忘れまいぞ、今宵はお里と爰にゆるり、かゝとおれとは離座敷、寢て花やろと蒲團敷く。惟盛卿はつく〴〵と身の上又は都の空、若葉の内侍や若君の、事のみ思ひ出されて、心もすまず氣も浮かず、打消れ給ひしを、思はせぶりとお里は立ち寄り、コレイナこれな、オ、辛氣、何初心な案じてぞ、二世も三世もかための枕、二つ竝らべてこちやねと、先へころりと轉寢は、戀のわなとぞ見えにけり、惟盛枕に寄添ひ給ひ、これまでこそ假の情、夫婦とならば二世の緣、結ぶにつらき一つの言譯、何を隱さう某は、國に殘せし妻子あり、貞女兩夫にまみえずの掟は、夫も同じ事、二世のかためは赦してと、流石に小松の嫡子とて解けた樣でも何處やらに親御の氣風殘りける。神ならず佛ならねば夫ぞとも、知らぬ道をば行迷ふ。若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き、手負の事も賴まんと、思ひよる身も緣のはし、此家を見かけ戸を打叩き、一夜の宿と乞ひ給へば、惟盛は好い退き機と表の方叩く扉に聲をよせ、此内は鮓商賣宿屋ではござらぬと、愛想のないが愛想となり、イヤ申し稚きを連れた旅の女、是非に一夜を宣ふにぞ、斷り云うて歸さんと、戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君

はつと戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ〳〵立寄り見たまへば、早くも結ぶ夢の體表に内侍は不思議の思ひ、今のはどうやら我夫に、似たと思へどなりかたち、つむりも青き下男よりもやと思ひ給ふ中、戸を押し開いて惟盛卿、若葉の内侍か六代かと宣ふ聲に、シエ、扨は我が夫、と様か、ノウ懐かしやと取縋り、詞はなくて三人は、泣くより外の事ぞなかりき。先々内へと密に伴ひ、今宵は取わけ都の事、思ひくらして居たりしが、親子共に息災で不思議の對面、去りながら某此家に居ることを、誰知らせしぞ殊にまた、遥々の旅の空供連れぬも心得ずと、尋ね給へば若葉の君都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門殘らず討死と、聞く悲しさも嵯峨の奥、泣いてばつかり暮せしに、高野とやらんにおはすると云ふ者ある故に、小金吾召連れお行衛を、心さす道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、賴みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中將惟盛様が、此お姿は何事ぞ、袖のない此羽織に、此つむりはと取付て、咽び絶入り給ふにぞ、面目なさに惟盛も、額に手をあて袖をあて、伏沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、若い女中の寢入ばな、定めてお伽の人ならん、斯くゆるかしきおくらしなら都の事も思召し、風の便もあるべきに、打捨て給ふは胴慾と恨み給へば、ホ、夫と心にかゝりしかど、文の落ちる恐れありわけて、此家の彌左衛門父重盛の恩報じと、我を助けてこれ迄に、重々厚き夫婦が情、何がな一禮返禮と、思ふ折柄娘の戀路、つれなく云はゞ過あらん、かへつて恩が仇なると、假の契りは結べ共、女は嫉妬に大事も洩すと、彌左衛門にも口留して、我身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りしと、語り給へば伏したる娘、こたへ兼しか聲を上げて、わつと許りに泣出す。コハ何故と驚く内侍若君引連れ逃退んとしたまへば、ノウコレお待ち下されと、涙とゝもにお里はかけより、先づ〳〵これへと内侍若君上座へ直し、私はお里と申して此家の娘いたづら者憎い奴と、思召されん

申譯、過つる春の頃、色めづらしい草中へ、繪にあるやうな殿御のお出惟盛様とは露知らず、女の淺い心から、可愛らしい、いとしらしいと、思ひ初めたが戀のもと、父も聞えず母親も、夢にもしらしてくださつたら、譬へこがれて死ねばとて、雲井に近き御方へ、鮓屋の娘が惚られうか、一生連添ふ殿御ぢやと、思ひ込んで居るものを、二世のかためば叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に、あづかりましたとどうと伏し、身をふるはして泣きければ、惟盛卿は氣の毒の、内侍も道理の詫び涙かはく間もなき折からに、村の役人かけ來り、戸を叩いて、コレ〳〵爰へ梶原様が見えまする。内掃除しておかれいと云ひ捨て立歸へる。人々はつと泣目も晴れ、いかゞはせんと俄の仰天、お里はさつそくに心付き、先づ〳〵親の隱居屋敷、上市村へと氣をあせる、實に其事は彌左衛門、我にも敎へ置きしがと、最早開かぬ平家の運命、檢使を引受け潔く、腹かき切らんと身拵へ、内侍は悲しく、コレ此若の幼い氣盛りを思召し、一先づ爰をと無理やりに引立てたまへば惟盛も、子に引かさるゝ後髮、是非なく其場をおち給ふ、御運のほどぞ危ふけれ。樣子を聞いたかいがみの權太、勝手口より躍り出で、お觸のあつた内侍六代、惟盛彌助めせしめてくれんと、尻引からげかけ出すをコレ待つてとお里は取付き、兄樣これは一生の私が願ひ、見赦して下されと、賴めど聞かず刎飛し、大金になる大仕事、邪魔ひろぐなと、すがるを蹴倒し張とばし、最前置きし銀の鮓桶、これ忘れてはと提げて、後を慕うて追うて行く。ノウとゝ樣かゝ樣と、お里が呼ぶ聲彌左衛門母もかけ出で何事と問へば娘は、これ〳〵〳〵、都から惟盛樣の御臺若宮尋ねさまよひお出であり、積る咄しの其中へ詮議に來ると知らせを聞き、三人連れて上市へ落しましたを情けない、兄樣が聞いてゐて、討取るか生捕て、褒美にするとたつた今、追かけてと云ふより惱り彌左衛門、ソレ一大事とたしなみの朱鞘の脇差腰にぼつ込み、かけ出す向ふへハイ〳〵ハイと矢筈の提灯梶原平三景時、家來數多に十手持たせ道を塞ぎ、ヤア

老耄め何處へ行く、逃げやうとて逃さうかと、追取まかれてはつと吐胸、先も氣遣ひ、爰も遁れず七轉八倒心は早鐘、時に時つく如くなり、ヤア此奴横道者。おのれに今日惟盛が事詮議すれば存ぜぬ知らぬと云ひ拔ける。其まゝにして歸へせしは思ひよらず踏込む爲、此家に惟盛かくまひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打取ものも取あえず、來れ共、油斷の體はおのれを取逃すまい爲、サア首討つて渡すか、但し違背に及ぶか、返答せよとせめつけられ、叶ぬ所と胸をすゑ、成程一旦はかくまひないとは申したれ共、餘り御詮議强き故、隱しても隱されず、早先達て首討たり、御覽に入れんお通りと伴ひ入れば母娘どうなる事と氣遣ふ中、鮓桶提た彌左衛門、しづ〳〵出て向ふに直し、三位惟盛の首、御受取り下されよと蓋をとらんとする所を女房かけよりちやつと押、コレ親父殿、この桶の中にはわしがちつと大事の物を入れておいた、こな樣明けてどうするぞ、ホ我は知まい、此桶には最前惟盛卿のお首を入れ置いた。イヤ〳〵此桶にはこなたに見せぬ物があると、引寄すれば引戾し、おのれがなんにも知らぬ故、イヤこなたが知らぬ故と、妻は銀と心得て爭ひ果ねば、梶原平三、扨はこいつら言ひ合せ、縛れくゝれと下知の下、縛つた〳〵と取卷所に、惟盛夫婦餓鬼め迄、いがみの權太が生捕つたり、討ち取つたりと呼はる聲はつとばかりに彌左衛門、女房娘も氣は狂亂いがみの權太はいかめしく、若君內侍を猿縛り、宙に引立て目通りに、どつかと引すゑ、親父の賣僧が二位惟盛を熊野浦より連歸り、道にて大窓をそりこぼち、青二才にして彌助と名をかへ、此間はほてくろしき聲せんさく生捕つて面恥し存じたに、思ひの外手强い奴村の者の手をかつて、漸と討取り、首に致して持參御實檢と差出すオ、成程刎毀ち彌助と云ふは存じながら、先達て云はぬは彌左衛門に、思ひ違ひをさそう爲、聞き及んだいがみの權、惡者と聞いたがお上に對しては忠義の者、出かした〳〵、內侍六代生捕たな、ハテよい器量、夢野の塵で思はずも女鹿子鹿の手に入るは、天晴れ働

き、褒美には親の彌左衛門めが命、赦してくれう。イヤ〳〵申し、親の命ぐらゐを赦して貰うと思うて此働きはいたしませぬ。スリや親の命は取られても褒美がほしいか、ハテあのわろの命はあのわろと相對、私には兎角お銀と願へば梶原、ハテ小氣味のよい奴、褒美くれんと着せし羽織、脱いで渡せば佛頂面、コリヤ〳〵其羽織は忝くも頼朝公のお召かへ、何時つでも鎌倉へ持ち來らば、金銀と釣替囑託の合紋と、聞くより頂き出來た〳〵、當世かたりが流行るによつて二重取りをさせぬ分別、ようした物と引替に、縄付き渡せば請取つて首を器に納めさせ、コリヤ權太、彌左衛門一家の奴等暫く汝に預くる。お氣遣ひなされますな、貧乏ゆるぎもさせませぬテ、扨けなけな男めと擧そやし梶原平三、縄付引立てたち歸へる、ア、これ〳〵其ついでに褒美の銀忘れまいぞと、見送る隙間油斷見合せ彌左衛門、にくさも憎しと引だかへ、ぐつと突込恨みの刄うんとのつけに反返る、見るに親子はハッはつと憎いながらも悲しさの、母は思はず馳寄つて、天命知れや不幸の罪、思ひ知れやと云ひながら、先だつものは涙にて、伏沈みてぞ泣居たる。彌左衛門齒がみをなし、泣くな女房、なにほえる、不便なの可愛なのと云ふてこんな奴を生けて置くは、世界の人の大きな難儀、門端も踏すなと云ひつけて置いたに内へ引入れ大事の大事の惟盛樣を殺し、内侍樣や若君を、よう鎌倉へ渡したな、腹が立つて〳〵涙がこぼれて胸が裂ける。三千世界に子を殺す、親と云ふのはおればかり、天晴れ手柄な因果者に、よう爲居つたと拔身の柄、碎るばかりに握り詰め、ゑぐりかけるも心は涙いがみにいがみし權太郎、刄物押へて、コレ親父殿、なんぢやい。此方の力で惟盛を助ける事は、叶はぬ〳〵。コリヤ云ふな今日幸ひと、別れ道の傍に手負の死人、よい身替りと首討つて戻り、此中に隱し置き、コリヤこれを見居れと、鮒桶取つて打明ければ、ぐわらりと出たる三貫目、シャッ、こりや銀ぢや、こりやどうぢやと呆れ果てたるばかりなり。手負は顔を打詠め、おいとしや親父樣、私が根性が惡さ

に御相談の相手もなく、前髪の首を惣髪にして渡さうとは、了簡違ひのあぶない所、梶原ほどの侍が、彌助と云ふて青二才の男に仕立てある事を知らいで討手に來ませうか、夫と云はぬはあつちも工み、惟盛様御夫婦の路銀にせんと盜んだ銀、重いを證據に取かへた鮒桶、明けて見たれば中には首、はつと思へば是も幸ひ、月代剃つて突付たは矢張りお前の仕込みの首、ムウ其又根性で御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉へ渡したぞ、ホホ其お二人と見えたのは此權太が女房忰、ヤアシテ〳〵惟盛様御夫婦、若君は何所に、オ、逢はせませうと袖より出す。一文笛吹立つれば、折よしと惟盛卿、内侍は茶汲の姿となり、若君連れてかけつけ給ひ、彌左衛門夫婦の衆、權太郎へ一禮を、ヤア、手を負つたかと驚くも、お變りないかと惚りも、一度に興をぞさましける。母は悲しさ手負に取付き、かほど正しき性根にて人に疎まれ譏らるゝ、身持はなぜにしてくれた。常が常なら連合も、むざと手疵も負はせまい、酷い事をとせき上て、悔み歎けば權太郎、アレ其悔み無用々々、常が常なら梶原が、身代り食ふては歸りませぬ、まだそれさへも疑うて、親の命を褒美にくれう、忝いと云ふとはや、詮議に詮議をかける所存、いがみと見たゆゑ油斷して、一ぱい食ふて歸りしは禍も三年と、惡い性根の年の明け年生れ付いて賭勝負に魂を奪はれ今日もあなたを二十兩、かたり取つたる荷物の中に、恭々しき高位の繪姿、彌助が面に生うつし、合點がいかぬと母人へ、銀の無心をとりに入込み、忍んで聞けば惟盛卿、御身に迫る難儀の段々、此度性根改めずは、いつ親人の御機嫌に、預る時節もあるまいと、打つてかへたる惡事の裏、惟盛様の首はあつても、内侍若君はかはりに立つる人もなく途方にくれし折からに、女房小さんが忰を連れ。親御の勘當、古主へ忠義、なにうろたへる事がある、わしと善太をこれかうと手を廻すれば忰めも、かゝ様と一所にと、俱に廻して縛り繩、かけても〳〵手がはづれ、結んだ繩もしやら解け、いがんだおれが直な子を持つたは何の因果ぢやと、思ふては泣き、しめては

泣き、後手にした其時の、心は鬼でも、蛇心でも、こたへ兼たる血の涙、可愛や不憐や女房も、わつと一聲其時に、血を吐きましたと語るにぞ、力味かへつて彌左衞門、ヱ、聞えぬぞよ權太郎、孫めに繩をかける時血を吐く程の悲しさを、常に持つてはなぜくれぬ、廣い世界に嫁一人、孫と云ふのもあいつ一人、子供が大勢遊んで居れば、親の顏を目印に、にがみのはしつた子があるかと尋ねて見ては、コレ子供衆、權太が息子はゐませぬかと、問へば子供はどの權太、家名は何と尋ねられ、おれが口からまんざらに、いがみの權とは得云はず、惡者の子ぢや故に、はね出されて居るであらうと、思ふ程猶そちが憎さ、今直る根性が

半年前に直つたら、のうばゝ、親父殿、嫁入や、孫の顏見覺えて置うのに、オ、〳〵おれもそればつかりがとむせ返り、わつとばかり伏しづむ心を思ひやられたり、內侍ば始終御涙、惟盛卿は身にせまる、いとど思ひにがきくれ給ひ、彌左衞門が歎き去る事なれ共、逢ふて別れ逢はで死るも皆因緣、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、內侍が供せし譜代の家來、生きてつくせし忠義は薄く死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因緣と語り給へば、テモ扨てもそんならこれも鎌倉の、追手の奴等が皆しわざ、オ、云ふにや及ぶ、右大將頼朝が、威勢にはびこる無得心、一太刀恨みぬ殘念と、怒りに交る御涙、實にお道理と彌左衞

門、梶原が預けたる陣羽織を取出し、これは頼朝が着がへとて、褒美の合紋に殘し置きし、ずた〳〵に引裂ても御一門の數にはたらねど、一裂づゝの御手向、サア遊ばせと差出す、何頼朝が着がへとや晉の豫讓が例を引き、衣を刺して一門の恨みを晴らさん思ひ知れと、御はかせに手をかけて、羽織を取つて引上け給へば裏に模樣か歌の下の句、內や床しき、內ぞ床しきと、二つ竝べて書たるは、アラ心得ず此歌は小町が詠歌雲の上はありし昔にかはらねど、見し玉簾の內や床しきとありけるを、其返しとて人も知つたる此歌を、もの〳〵しう書いたは不思議、殊に梶原は和歌に心を寄せし武士、內

や床しきは此羽織の、縫目の内ぞ床しきと、襟際付際切りほどき、見れば内には袈裟衣、珠數迄添へて入置いたは、コリヤどうぢやコハいかにと呆れる人々惟盛卿、ホウさもそうづさもあらん、保元平治の其の昔、我父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流人、其恩報じに惟盛を、助けて出家させよとの、鸚鵡がへしか恩返しか、ハア、敵ながらも頼朝は天晴れの大將、見し玉簾の内よりも心の内の床しやと、衣を取てこれとても、父重盛の御陰と頂き給ふぞ道理なる。人々はつと悦び涙、手負ひの權太は這ひ寄り摺り寄り、及ばぬ智恵で梶原を、たばかつたと思ふたが、あつちが何にも皆合點、思へばこれまでかたつたも、後は命をかたらるゝ、種としらざる淺ましと、悔みに近き終り際、惟盛卿もこれ迄は、佛を語つて輪廻を離れず、離るゝ時は今此時と、髻ぶつつりと切給へば、内侍若君お里はすがり、倶に尼共姿をかへ、宮仕へをゆるしてと願へど叶はず、打拂ひ〳〵、内侍は高雄の文覺へ、六代が事頼まれよ、お里は兄になりかはり、親へ孝行肝要と、立出で給へば彌左衛門、女中の供は年寄りの、役と諸共旗用意手負を勞はる母親が、ノウコレつれない親父殿、權太郎が最後も近かし、死目にあふて下されと、止むるにせきあげ彌左衛門、現在血を分けた悴を手にかけ、どう死目にあはれうぞ、死んだを見ては一足も、あるかるゝ物かいの、息ある内は叶はぬ迄も、たすかる事もあらうかと思ふがせめての力草、留るそなたが胴慾と、云ふて泣き出す爺親に、母は取わけ娘は猶、不愍々々と惟盛の首には輪袈裟手に衣、手向の文の阿耨倶陀羅、三藐三菩提の門出、高雄高野へ引き別くる、夫婦の別れに親子の名殘り、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、芳野に殘る名物に、惟盛彌助と云ふ鮓屋、今さかふる花の里其名も高くあらはせり。

高安月郊作
豊澤仙左衞門節付

さくら時雨

東京で初めての上演

大門口の段
櫻町佗住居の段

大門口の段
櫻町佗住居の段

竹本錣太夫
豊澤新左衞門

切　竹本土佐太夫
　　野澤吉兵衞

琴　竹澤團二郎

これは高安月郊氏が明治三十九年に作られて、同年夏豊澤仙左衞門師が節付をなし、その秋堀江の芝居で竹本土佐太夫（當時の伊達太夫）が初演した淨瑠璃で、其後しばらく絶えて居りましたのを、昭和七年十月の大阪文樂座で久々に上場、絶讃を博した名作で有ります。東京としては此度が初めてで、而も老巧圓熟の土佐太夫が得意の節調、榮三文五郎等の人形の妙味、必ずや皆様の御期待にそふ陶醉境を現出する事と存じます。

その内容は、京の吉野太夫と灰屋三郎兵衞の風雅な戀に、本阿彌光悦の洒脫や父紹由の禪味を加へ、茶道の床しさと人の世の情愛を描す氣品高き名作、墨繪の淡彩にも似た風趣をそなへ、作者高安氏が「風流の道」に就いて新しい一つの型を開いたものと謂はれて居ります。

劇壇の方では故片岡仁左衞門の十八番として定評がありました枯淡な舞臺、名優仁左衞門の至藝を偲ぶよすがとしても此度の上演は意義深きことで有りませう。

人形

門番與右衞門	桐竹門造	
座頭德の市	吉田玉德	
遊客百姓	吉田文二郎	
遊客武士	吉田玉市	
小刀鍛冶金治	吉田文作	
三郎兵衞父紹由	吉田玉次郎	
此江應山	桐竹紋十郎	
遊客世之助	吉田扇太郎	

（床本）

大門口之段

既に其夜も更行きて、内も靜まる騒ぎ歌。辻の行燈もやゝ眠る、茶屋の編笠二ツ三ツ、四ツと殘るが大小に客の吟味も門番の、與右衞門は酒機嫌、店の床几にこけかゝれば、三味線脊に德市が、歸る足音聞咎め。コリヤ待て。ヘイ〳〵どなたでござりますな。さう云ふ貴樣は何者じや。チヽ與右衞門樣じやないか、よい機嫌じやな。フン德市が、イヤお前でも只は通さぬ、吉野の山でも諷ふて行け。エヽ、夫れはもうせんど諷ふて來ました御免〳〵と急ぎ行く。續いて來るは編笠に、顏は隱せど武家ぞとは、羽織袴と後に附く、髭も造りし奴まで、酒もなごりもまた殘る、あゆみものうき千鳥足、與右衞門もちろ〳〵眼。エイ又うせたのは何者じや。さう云ふは何者じや。謠抑々是は元祖與右衞門九代の後胤代々門番與右衞門なり。エイこいつ知盛と出おつたな、よしそんなら此方も辨慶で請けてくりよ。謠打物業にて叶ふまじと、草履さら〳〵押もんで、東方高尾太夫、西方夕霧太夫、中央吉野太夫の衆にかけて祈られ、門番次第に遠ざかれば、奴は旦那に力を合せ、預けし大小取て渡せば、猶天神はしたひ來て、おさらばえ、さらば〳〵といふ汐に後白浪とぞなりにけ

人形

女房 おとく	吉田文五郎
灰屋三郎兵衛	吉田榮三
傀儡師	桐竹紋太郎
番頭五兵衛	吉田光之助
父紹由	吉田玉次郎
侍源吾	吉田玉幸
本阿彌光悦	吉田玉松

る。鐘も消行夜半の風、夢は覺めても夢たどる、金次は思ふ一端と逢ふて盃酌かはし、夫れにて思ひ切よとは、慈悲か無慈悲かしみ〳〵と、異見に又と云はれもせず、さりとて思ひ切られぬは、所詮命にからみつく、君の一目をさらば垣、我も暇の柳かと、茶屋の硯に一筆を、殘すこなたに是は又我ならねども子の迷ひ、親の紹由は兎や角と、切つて切られぬ恩愛の、道は一筋品變る、三筋町とはあなたかと、覗く向ふにはやり歌。唄 吉野の山を雪かと見れば、雪にはあらで花の吹雪よ、詞 あの歌は三筋町、文句も同じ吉野とは折も折とて氣にかゝる、雪か花か花吹雪、所詮散らねば成らぬかなア、唄 君故ならば雪の野に寢まし、よしや此身は消るとも、恨み歎きも今は早、名殘り斗りと振返り、又も金次は燈火の、薄き方へとあこがれて、足はそら行後に落つ文を紹由は取上ぐれば、吉野様へ、ナニ〳〵先程は思ひがけなくお盃下され、細々との御異見、嬉しく又悲しく存候、所詮ながらへ候はゞ無用の煩惱晴れ申すまじく、今の御姿の目に付候中、桂川へ身を捨申候、決して〳〵お恨も何も是なく、只哀れと思召し下され候はゞ心よく相果申べく候。ア、コリヤ死ぬ人が有そうな、ア、恐ろしや〳〵夫程迄に迷はす女子、とても思ひ切

まいな、併し思ひ切ぬ斗りか、若しやこんな身の果に、あれも成りはせまいかなァ、唄思ひ切れとは身のまゝか、誰かは切らん戀の道登り詰たる世之介は、春の行衛に氣も亂れ、あたりきよろ〳〵尋ねくる紹由は夫れと氣も付ず。モシ一寸お尋ね申ます、吉野太夫は、どこに揚られて居りますな。ナニ吉野、ヲ、吉野、吉野ならサアござれ、わしと一緒に行ませうと、手を取て行かゝれば、エ、是は何をなされます。イヤ何もせぬサアござれ、私は是がら身請する。エイ何を云つしやるのじや。何を云はふぞ太夫の事、吉野より外に云ふ事はエ、まアないわいなァ。エ、こりや氣が違ふたさうな。ヲ、氣も違ふ死にもせう、いつそ其男を殺してやらうか。エイめつそふな、そんな事を云はずに、内へお歸りなさりませ、親御があんじてござりましよ。アハ、、イヤ私に親はござらぬわい。親がないとはアゝ、お氣の毒な。親がない故勘當もされぬのじや。エイ。親より子より吉野一人、最一度顏なと見たいなと、又も入行其姿、丁度我子の年恰好。これは氣狂ひ、あれは身投げ、悴は何に成らうやら。破れ菅笠しめ緒がきれて、更に着もせず捨もせず。あはれ我子が手を引て、女連行朧夜や、扨はゑにしも是迄と、見送る後、應山世之介、戀も哀れも恩愛も、俱におぼろと三重成にけり。

（床本）

櫻町忙住居の段

音羽川、世に流れては秋と鳴る、風も身にしむ櫻町、落る木の葉に夢覺めて、窓の月見るきのふけふ、書は身過と土ひねり、妻は扇の地紙折、手わざはかなき暮しなり、唄哀れ成かな對王丸、安壽姫のはらからは山椒太夫の家を出で、別れの辻まで來たりしが、山へ行くかよ弟よ、濱へござるか姉上よ、頓て歸らせ給へやや、さらば〳〵と立別る。詞ア久々で傀儡師文句も丁度山椒太夫。イヤコレおとく何なとやつて

やりや。アイとお徳は立上り、あたり見れども一ひらの金氣盡きたる痩世帶、簪拔て與ふれば、チヽ太夫樣では御ざりませぬかエヽ御存じで御ざんすか。エヽ知つて居る段では御ざりませぬ、二三度も御座敷へ呼ばれまして、お目にかけた事も御ざります。ムヽムヽヽ扨は是が只今のとあたり見廻し興覺顏マア〳〵變つたお住居で御ざりますな。サア住居も變れば氣も變り、結句氣樂で御ざんすはいな。ムヽヽお氣樂と云へばヤ是は又お氣樂な、私も氣樂な人形まはし、時々お伺ひ致しましよ、併これは結構な品、こんな物を戴きましては濟みませぬ、アノ十文でも二十文でも、其方がよろしう御ざります。サア其十文もない程に、夫など持て行て下さんせ。エヽアノ十文も、イヤなうて私には仕合で御ざりますアハヽヽ、それでは頂戴致します、併以前の事を思ひますと、安壽の姫よりお變り樣が、アヽコリヤお客樣より、人形遣ひの方が悲しうなつてまいりましたと、涙拂ふて歸り行。三郎兵衞は苦笑ひ。イヤモ兎角知つて居る者が多ふて困るのう、是では山の中へでも這入た方がまし、然し夫では又職がなくなる、こんなはかない土なぶりでも、どふか斯か暮されるのに、山の中では落葉を着て、木の實でも拾はにや成まい。サイナア、寒山と山姥の二人ぐらしは誰の畫にも御さんせぬ。ほんにそふじやのふアハヽヽ、チホヽヽと打笑ふ。聲も淋しき詫住居番頭五兵衞は今も猶、主の思ひのまめやかに、元の姿になをさんと、人にも云はずけふも又、樣子いかにと尋ね來て、ヤ御免なされませ、チコリヤたいそふ御精が出ますな。チヽ五兵衞か、精を出さねば口が干上るイヤ若旦那にも大分汐が染みましたな。サア潮が染んでも浮び上らぬわいの浮世の波はアヽ荒い物じやなといふに爰ぞと五兵衞は摺寄。其荒波も御本家の、大船へお歸りなされます御量見は御ざりませぬか。サアない事はなけ

れ共、勘當といふ二字には、寄付事も出來ぬでないか。サ、、そこで御ざります、其御勘當もお心次第で、ゆりまい物でも御ざりませぬがと、後はお德に憚る體、夫と察して女房は、ドレお茶一ッ入ませうと、勝手へこそは入りにけれ。後見送りて小聲に成り。申々アノ太夫で御ざります、モ不粋な事を云ふやうで御ざりますが、何を申も太夫から、斯云事になりました故、そばにお置なされましては、いつまでも果しが御ざりませぬ、何ほ御苦勞なされましてもモ。何をしほにゆりませう。大旦那の思し召は伺ひませぬが、太夫さへおいなしなされましたら、夫が第一御改心の證據、夫をもとに御親類中から、お口添へなされましたら、つい埒の明く事と存じます。ア、コレ五兵衞、お前は貧乏人の內に生れて、其年迄灰屋の番頭、また金を遣ふた事がない故、金の値打を知らぬな、どうじや、三日程大盡にしてやらふか、私は少し斗り金を遣ふたが、今から思ふとありや金が遊んだのじや、追從も輕薄も、皆金に仕て居たので、私の心は有頂天どこへやら飛で居た、所がかねがなく成たので、驚いてわれに歸り、人の心も世の味も、腸に染み込んだ成程本家には金は有、併し本家に居る中は、遊女通ひをせぬ迄も、魂は拔けて居る、おとなしう仕た所で金の番人、今では一文もない暮しじやが、此あばら屋にも心は有、魂がすわつては、宮もわら家も同じ事薄茶の泡を飲む味は、こりや今迄知らなんだと心明せど五兵衞は解しかね。イヤ申負惜みをおつしやりますな、何じや負惜みじや、ハ、、、イヤ分らぬ奴じやな、マア〳〵一服飲してやらふと、茶碗二ッ取出し、コレこれを見い、こちらはさるお屋敷から、底をつけいとおこされたが、聞けば加藤清正が朝鮮土產、太閤へ獻上したといふ、利休の銘もある茶碗、それでは千金でも得難からふ、しかしこふひどふ損じては、國も時代も違ふた

土でつくろふても風情がない、コレ此方はわしが是を見て、其風韻を呑み込みこしらへた物、丁度是が前と今の私の身の上、内に居る時分は、金は有ても利休の茶碗じや、名器と云斗りで、コレ此通り底がない、茶所か水も飲まれぬ、今では粗末な樂燒じやが、底も有、味もあると云へどいよ〳〵呑こます。テモ千兩の茶碗で飲だら、一しほ味がようございましよ。何じや味がよいイヤどこ迄も分らぬやつじやな。わからぬのは、あなたでございます。エヽお前が分らぬのぢや。いいえあなたが分りません、何お前が。いゝえあなたが。いやお前がもう好い加減に目をおさましなされませ。何目をさませ。三郎兵衛はむつとしてきせる取るより利休の茶碗、たゝきわれば五兵衛は仰天。夫はマア〳〵何をなされます、千兩の代物をと、呆れる體に高笑ひ。ワハヽヽヽサ斯割た所は遊女通ひに身代を潰した所、大家でも名器でも、割うと思や、たつた一と打、是で金の價はなくなつた、何ほ是を繼ぎ足しても、元のやうに迎も成らぬ、夫より別にかうしたら、風韻も有滿足な、始めてうまい茶が飲める、サア一服飲で見いと云へど此方は尚迷惑。イヤモウ〳〵結構でござります、又お伺ひ致しませよ。いや、茶が飲めぬやうなものは來るには及ばぬ。ヤ是は恐れ入ます、とそこ〳〵に立出て、又詮方も投首の思案盡てぞ歸り行、お德は始終洩れ聞て、男の心今更に、嬉しくつらき我身の上、行くにゆかれずとどまりて、いよよ薄らぐ夕日影、情のみにて送られぬ世の冬枯を何とせんと、三郎兵衛の傍に寄。夫れではあなたはどう有ても。何の別れてよいものか、たとひ飢にせまつても、心の内は安樂世界。アノ結構な御本家も。サア情がなくば石瓦。壁もあらはの詫住も、あはれが結句嬉しい。と。云ふにこなだは猶嬉く、過し廓の春秋や、花の朧に逢ひそめて、又の逢瀨をほとゝぎす、待てどつれなき一聲に、

胸の思ひは螢とも、飛べば飛かう胡蝶より、風も忘れてかりがねの、かはす翼に霜降ば、いとゞ燃へ立紅葉ばを、戀の限りと思ひしも、戀の麓にまだ迷ふ、雪と身にしむ眞心は、悲しいものとよゝと泣、男も同じ哀樂の、きはみを今ぞ思ひ知る、空もしぐれて見えにけり。降らぬ内にと箱取上げ、行くをおとくは門の戸に、立ちて送れば月は西、君は東へあけの朝。過ぎしきぬ〳〵思はれてせめて釜には松風の、音たぎらせて置ふかと、清水汲では爐にむかひ、獨り靜に待居たり。雲は走るか夕時雨、煙うるほふ鳥部野の、歸るさ遠き老の足、紹由は晴間待たばやと、あたり見れ共小家がち、賤の伏屋にやゝ深き、軒に避くれば丸窓の、中もしぐれの松風に、あはれ伽羅たくぬしや誰、中にも誰とよしの窓、少し開けばはら〳〵と、袖と袖とに降雫。申し〳〵そこでは雨かかゝります、マア此方へお這入なれませいなア。ヤ有難う存じます。イヤコリヤどうも仕樣がない、夫では御免なされませと、入れば詫しきあばら屋に春はひそむか、一ひらの花の手づから立て出す、木の芽いろ添琴の音や。唄花は雪、時雨はたれの涙ぞや。ゑにしあやしき假の宿、知るも知らぬも夢の身の、何を隔てん世の中は、さなきだに墨繪にかきし松風の聯。詞ア、珍らしい小倉の色紙、山の中にも鹿ぞ鳴く。花の雫は此時雨か、松風は與次郎の、釜に波立つ阿彌陀堂、樂は光悅樣でございます。イエ主の手つくねでございます。ヤ夫れは一しほ面白い、槇立つ山の秋のくれ。さびしい中に一色の、紅葉の蔭の此お手前、ア、結構なお茶でございます。是は痛み入まする、最一ツいかゞでございます有難ふ存じます、はからず上つて此御馳走、失禮ながらお召使もなく、御主人は御不在と見えますな。ハイ一寸そこ迄參りました。そして只お二人のお暮しでございますか。左やうでございます。夫はまあ一體何をなされますと、

あたり見廻はしする物や、扇、短冊取上て。エ、ナニ破窓に伽羅の染込む時雨かな〳〵。イヤ是でこそ誠に風雅じや、世を遁れた樂隱居、遊んで暮せば穀つぶし、世を捨てた道心も功德がなければ死人も同然、職もあり、樂も在り、詫もあり、花もあり、是が誠に浮世の味、イヤ茶の湯の味でござります御主人はどなたやら、私にも悴が一人ござりましたが酒は呑でも茶は飲まず、遊びは知つても道は知らず、たわけを盡した其果は、とう〳〵勘當しましたが、どうなつたやらそれぎりに行衞も今に分りませぬと、云へばおとくは手を止め。なぜお赦しなされませぬえ。夫は赦す事は成ませぬ、浮世の味を悟らねば、內へ入れても人にはなりませぬ。ム、そんならお悟りなされましたら。ア、イヤ〳〵まだ最一ツ成ぬ譯がござります、氣强いと思し召かは存じませぬが、それも又此世の道、魂から磨かねば、身も立たず家も立たず、まんざら敎へなんだのでもござりませぬが、不足がないだけ氣儘となり、魂拔けて色狂ひ、今では何となつたやら、まだ迷ふて居るか、悟つたか、氣が違ふたか、死だかと、秋の夜長の寢覺がち、やう〳〵寒う成に付、京の町をうろ〳〵と、恥かしい姿しをらぬか、海山隔てた遠國で、苦しい業でもして居るかと、問ふに問はれぬ其せつなさ、思ひのせいか身も弱り、先も見える老の命、もしや是切逢れぬかと、人知らぬ涙もこぼしますと、云ふこなたも身の上に似たるあはれの俱涙、拭ふ布巾も濕ふて、帛沙さばけどさばかれぬ、うきは戀路の終とは、あけて云はれぬ棗より、うつす木の芽は薄くとも、心を汲んで今一ツと、又立ちかゝる其所へ、つか〳〵入來る侍源吾。主はどこじやどこへ參つた。ハイ只今一寸出ましたが、何ぞ御用でござりますか。ヤア何ぞ用とはしら〳〵しい、きり〳〵早う出してしまへ。エ、出せとはそりや何をへ。エ、まだとぼけをる、利

休の茶碗じや、ありや此方より注文して、體よく繼げいと申付たに、贋物を拵らへて、本物を打割つたとは、けしからぬ横道者、彼是云はずサ出して仕まへ。デモ割つたに違ひござりませぬ。何割つたに違ひない、コリヤ、〳〵、彼品を何と思ふ、千金萬金を積めば迚再び手に入品と思ふか、御秘藏の中の御秘藏を打割つたでサ、濟むと思ふか、イヤサ割れましたと言上成ふか、腹切つて申譯此方は厭はぬが、夫斗りでも濟まぬわい、主の首をお目にかけねば、お怒はよも解けまいサア〳〵〳〵早く是へ出せい、是へ出せいと、烈火の勢ほひ詰めかゝれば、お德は水に請流し。マアそふおせきなされますと、お靜にお茶一服ヱ、此騷ぎに何の茶所か、一體何として打割つた、よも粗相とは云はれまい。サア夫れは。やつぱり隱して居らふがな。何の左樣ないつわりをそんなら何故。サア〳〵〳〵〳〵云譯なくば、覺悟致せと責付られ、お德は思案の胸を据。よろしう御ざりまする、そんならどうぞ此私をくゝりなりとどうなりと、ありや私の咎で御ざんす、是非命が入事なら、主じより私を切、云譯立て下さんせいなあ。ヲ、好い覺悟、サア觀念致せと振上る、白刀の下に茶碗を取上今を最期の此一服と手もふるはさず呑みほす體。紹由は感じ居たりしが今は猶豫もなり難しと其中へ割つて入り。マア〳〵お待ちなさませ〳〵ハテサテマ、お待なされて下さりませ、イヤ委しい譯は分らぬが、兎に角割れた利休の茶碗、いかに名器と云ながら、人の命に替へいでもどうか仕樣がありそふなもの、コレお女中あなたも何ぞ云わけは御ざりませぬか、サア其譯は知りませぬが一寸聞ばひどい缺けやう、國も時代も違ふた土で、底を付け繼ぎたしましても、猶更風情がござりませぬ故其風韻を呑込んで、新に作つて見ますれば、元が有つても無用の缺け、元が有つては迷ひの種と、夫れで碎いて仕舞いました

と、云に紹由は手を打て。ヤコリヤ面白いそこじや〳〵〳〵茶の味はヤそこに有、缺けた名器を珍重しやうより、其風韻を得たからは、元の形を無にするとは、禪家の風も有様な、あなたの御主人はどなたやら、こりや其通り言上なされ、よもや不埒とはおつしやりますまいと、云へど源吾は聞入れず、ア、イヤ〳〵其様な事ではゆるされぬ、邪魔せずと退け〳〵是非共首で申譯と、又ふり上る双の光、止めても止まらず、拂ひつ除けつ、あはやつれなき木枯に、飛ぶか落つるか、消ゆるかと、力限りに爭ふ所へ、思ひがけなき本阿彌光悦、夫れと見るよりかけ入つて、マヽお待ちなされ源吾殿、茶碗の事なら云譯入らぬ、應山公には殊の外の御機嫌じやと、いふにこなたは又驚き。それはまた何故に。さればさ今お館へ上つたら、一ッの茶碗をお見せなされどうじやと仰せなさる故、取つて見るとハア面白い、利休が見ても得心しさうな、よい出來と申上たら、夫れはこちらの作とやら、しかも元の名器を碎き、新に仕上て返へしたとは、確に名手の腸じやと、モ殊の外御賞美じや、モウ心配には及ばぬと、聞て源吾も落ついて然らばごのまゝ館へ歸り直に御意を伺はうと急ぎ足にて出でゝ行く紹由は殊に喜びて。ヤコレハ〳〵光悦様、よい所へ御出で下さりました、夫では應山公のお誂へで御座りましたか、それなればこそお叱りもなく却つておほめなされたとは流石ぢやなアそふして又當家の主人、殊に此女中はモシ一體何で御ざりますと、小聲で問へば打笑ひ。まだ知らずか。ハイはからず今の雨宿に一ぷくよばれてまだ名乘りも致しません、それではマア何と見えるな。さればあの氣高い所は上つ方の御落胤か。イヽヤ

違ふ。ム、そんなら覺悟のよい所は、お侍の流浪したのか。イヤ違ふ。ム、夫ではあの床しい風情の有るのは、土佐畫でも拔けましたのか。まだちがひますか、それではもしや妖怪變化ではござりませぬか。ハ、、元の姿を變化したありや吉野じや、こなたの息子の思ひものぢや。エ、。何と憎うは有るまいかのと、云へば紹由は言葉も出でず、あきれ果たる其折から、立歸る三郎兵衛、思はず顏を見合せて。ヤア親父樣か。ヲ、怪かとほろりと落つる一しづく涙と共に光悅はおもひやり。さあ勘當はゆりた〳〵是から吉野も改めて、灰屋の家の嫁御寮、もう云分はあるまいと、あなたこなたを納める本阿彌、紹由も今は殘りなく。ハイ〳〵〳〵何の申分がござりませう。ヤそれでは改めて挨拶を、イヤ是は始まして誠に不思議と申さうか、モよく〳〵の緣と申さうか、知らずに逢ふて嫁舅、心の底迄呑込ましだ、モウ〳〵〳〵これからは千代八千代變らぬかためは本阿彌樣、仲人と成て下さりませぬか。イヤ仲人は此時雨じや三々九度よりお茶一服、それで儀式ハヤちやんと仕舞た。成程左樣でござりますな、ハ、、そんならこれから直に本家へ、サア〳〵イヤコレ嫁女、此家も買ふて吉野窓、此儘印に殘しませうと、顏もかゞやく夕日かげ、吉野故に落ちぶれて、浮世の波に身をあらひ、吉野故に又歸る家は心の宿りぞと、知れば罪にもすぐはるゝ此世は時雨と晴れにけり。

× × ×

堀川猿廻しの段

切　豊竹古靱太夫
ツレ　鶴澤清六
　　鶴澤重造

人形

弟子おつる	吉田文之助
與次郎母	吉田小兵吉
猿廻し與次郎	吉田榮三
娘お俊	吉田文五郎
井筒屋傳兵衛	吉田扇太郎

近頃河原の達引

此浄瑠璃の作者は、近松半二だと云はれて居りますが、一説には天明二年頃市村座で上演された「猿廻し」の狂言を、同五年に爲川宗輔、筒井半二、奈河七五之助が加筆したのではないかとも云はれて居ります何れにしても天明二年正月竹本八重太夫が江戸に下つて、堀川の段を語り猿廻しの所が未曾有の評判であつたと云ふ事です。

扨、此のお俊傳兵衛の心中が最初に現はれましたのは、元祖都一中の土佐座で語つた「お俊傳兵衛河原の心中」だと云ふことです。此作の取材にも諸説があつて、元文三年十一月六日の朝聖護院の森で、發見された呉服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊との情死事件と、同じ頃京の公卿侍と所司代の下部とが四條顔見世芝居の歸途喧嘩双傷に及びし一件と、孝子として表彰された猿廻しの丹波屋佐七の話とを取合せ、佐七を與次郎に作りてお俊の兄として構想したものです。

堀川猿廻しの段

おなじ都も世につれて、田舍が增の薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、相の手もつれ氣もつれを保養がてらの藥風呂、あふぐも我を涼團扇、目さえ不自由な暮しなり「おつる樣、嘸ぞ待遠にあらう

なァ、そしてなにやらのさらへであつた。ォ、それ鳥邊山、アリヤじたい心中事、會にでも彈くのなら、お前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合にうたうがよいぞへ、ドレ〳〵お繁さんのかはりに私と掛合ひ　うたひませうと、老手彈手もしほらしさ、女肌には白無垢や、上に紫藤の絞、中着緋紗綾に黑繻子の帶、年は十七初花の雨にしほるゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黑き綸子に色淺黃裏、二十一期の色盛りをば、戀と云ふ字に身を捨小舟、どこへ取付島とてもなし、鳥邊の山はそなたぞと、死に行く身の後ろ髮、彈く三味線に祇園町、茶屋のやま衆が色酒に亂れて遊び騷ぎ合ひ、あの面白さ見る時は「アア、イエ〳〵それではとんと聲にしほれがないはいなあの面白さを見る時はと、かう諷ひなされ。アイ、あの面白さを見る時は「オットヨシ〳〵染殿、そなたと某が、去年の初秋七夕の、座敵踊をかこつけて、忍び逢ふた事思ひ出す「オ、今日はマアそこ迄〳〵、情が出る程あつて、きつう手も廻り出した。モウ〳〵何處で彈きなさつても、恥しいことはないぞへ、と聞いて笑顏の片男波又明日と云ふ汐に、お鶴は立つて歸りける。母を大事と油斷なき、身過ぎも輕き小風呂敷、肩に乘せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前與次郎はいきせき門口から「母者人々〳〵今戻つたぞや、ォ、兄戻りやつたか。嘸ひもじかろ、茶も湧いてある、膳もそこにして置いたぞや。ォ、德よ、今戻つたかよ、今朝から子猿めが親を尋ねてやかましい、コレ兄や、ちやつと傍へやつてやりやいの。アイ〳〵、左樣でござんせうとも、ソレちやつと乳を呑ましてやりをれ、イヤノウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるに付け、私が此長々の病も、いつ本服することであらうと思へば勞れの上に猶勞れる。僅な弟子衆の餘情や、我身の働きで、此養生がマヽなるものかと、思へば藥も毒となり、母ではなうて子供の爲には呵責の鬼と思はゐゝ、鬼は冥

途にあるものを、つれない老の命やと、身を悔みたるむせび泣き、哀れにも又いぢらしし「アヽコレ母者人、ソリャマァ何を云はんすぞいの、其様にみそやかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入した米やの息子殿から、長々お袋の煩ひで、嘸かし勝手が悪からうと云ふて、雪か花かと申すやうな上白米の仕送り、店々の旦那衆から、何なと用があるなら云うておこせ、若し出養生さしますなら、幸なる隠居所もある程にと、云ふて來るお方もあり、羊羹饅頭生魚近所隣へ早々すそわけもしられねば、鯛赤貝の類は、横町の鮓屋へ卸賣、モコレ案じる事は微塵もないぞや　それにまだ〳〵まだ氣の毒なは、此家主が此家を居なりに買てくれぬかと頼まれる、ヤレいやゝの〳〵ァ、あた世話な家持より金持が、遙かましであらうかと母に案じをかけさせぬ、贅八百さへ一貫に、たらぬ節季の事譯を、云ふ下稽古やこれなるべし。嘘とは知れど老の身は、子にしたがふがならひぞと　機嫌よげに打ちうなつき「オ、それ聞いて落付ましたが、落付かぬは娘が事、此間も親方が、お俊を預けに來ていはしやるには、コレ傳兵衛殿と云ふ客の事で、ちと内に置かれぬ事がある、假令傳兵衛が尋ねてござろう共、お俊が歸つてゐる事は、包み隠さねばならぬぞや、とくれ〴〵も云はしやつたぞや。サァわしも其入譯を聞いた故、お俊が心根を思ひやり、思はず知らず涙が、ドレ灯を燈そと棚のすみ　こそ〳〵取出す行燈の、灯かげも洩るゝ暖簾ごし「お俊、コレお俊、ァイと返事もしほ〳〵と、思ひなやみし顔形まあ〳〵爰へと小聲になり「門の戸はかけてある、見る人も聞く人もない、方々で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩、殺し人はサ、殺し人はわが身の客の傳兵衛殿なれど大恩請けた久八と云ふ者が代りに捕られて住つたけなが、其場に落てあつた小柄が、あの傳兵衛殿がお屋敷から、拜領した小柄ぢや故天命遁れず御詮議最中、なれども其夜から傳兵衛の行方も知れず、其おい方の女郎はお俊と事ふ事を

お上にもよう御存じで、親方の方へもいろ〳〵と御詮議あれど、これも行方が知れぬと云ひ切つて、今もめてある最中じやと、取々の噂評判。おりやもう聞く度毎にびく〳〵する、と聞く程せまるお俊が胸。「其夜の起りも皆私故、どこにどうしてござるやら、心元なさ逢ひたさも、云ふに云はれぬ此場の品、いかゞと胸もふさがりし母は一途に娘の可愛さ「コレ〳〵お俊案じることはないわいの、併し突き詰た男氣で、ひよつとこちの家へ來て、刃物ざんまいでも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに、も寢られぬまゝの物案じ世間にたんとある樣な、心中や、などしてくれたら、此母は目かいは見えず、兄はあれあの樣な臆病者、もしもの事があつたらば、跡で母はどうせうぞ、袖乞物貰ひに歩いても、そりやもう一つもいとやせぬけれど、そなたの體に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んで了ふぞや、若か氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てはと、詰らぬ義理を立拔いて、年寄の此母につらい目見せてたもんなや、と可愛さ餘る親心、ア、南無阿彌陀佛も涙聲。兄も共共ヤコレお俊「今母の云はるゝ通り、何の義理もへちまもいらぬ、どいてしまへばあかの他人ぢや、又おれも氣にかゝつて、好なものさへ咽へ通らぬわいのう、母者人の氣休め、おれが腹助けじやと思うて、どいてたも、ヤ、コレ賴むと賴むと正直一遍、母の心と兄の詞勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸の内、所詮死なねばならぬ身の、此場を拔けて其上でと、心一つに思案を極め、「母樣、兄樣お二人の、お詞よう合點いたしました、殊にまた傳兵衞さん、ツイ一通りで逢つた客、深い譯でもないわいなア、併し勤のならひにて、人の落目を見捨るを、里の恥辱とするわいな、とても末の詰らぬ事、わしや得心して居りまする「ちよつと逢つて其上で憎う惡うもない樣に、得心をさせまして、品よう譯の立つ樣に「イヤ〳〵其樣に譯立てると云やつても、あつちに得心せぬ時、それ〳〵行が

けの駄賃馬で踏殺し、アヽイヤイヤ無理殺しにせうも知れぬわいの、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの。オヽ、兄の云やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衛殿とやらも難儀、思ひきるのがあつちの爲、わが身に心引されては、つい捕へられるは知れた事、退狀やつたらそなたの事も思切つて、オヽ、切るとも〳〵、遠い國でも影を隱したら、身を遁れまいものでもないわいの、コレ〳〵むづかしかろ共、ツイ一筆、兄硯箱取つてやりや、サン早う〳〵と母と兄。詞にいなも泣顏を、隱す硯の海山と、重なる思ひのべ紙に、筆を立どの跡や先、涙に墨のにじみがちなる胸の内、書殘すとは露知らぬ、與次郎は傍から「コレノコレ其樣に長たらしう書ずとも、ツイどきますと書いてもすみさうな事じや。イヤノウ書いたものは後々迄も殘る物、男の去狀と同じ事、とつくりと譯の分る樣に書いてやるがよいぞや、アイ此狀にとつくりと、御合點の行樣に、兄さん、此文お前からお渡しなされてオットよし〳〵、此狀さへあれば千人力じや、マア〳〵母者人も落付しやれ、とやかく云ふ內九ツ前お前も奧でサ、ヽもうねやんせ、オヽ、それ〳〵、今夜こそゆつくりと、心よう寢るであらう。兄もそなたもそこに寢や、と奧底もなき隔てをば、押明てこそ入にける。

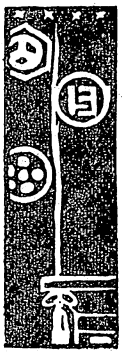
「サアお俊、こちらも爰で往生いたそ、アイとお俊が俱々に、暫し此世をかり蒲團、薄き親子の契りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ。頃しも師走十五夜の、月は冴れど胸の闇、過ぎし別れの云ひかはし、死なば一所と傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、彳む軒は見覺えの、樋に爰と門の戸へ、さはる相圖の咳拂ひ、聞くにお俊が飛び立つ思ひ、上げる枕も打はずす、與次郎は傍に高鼾、心も共に行燈の灯ふき消さし足に、心急ぐ程明兼ねる、戶口の繫金表にも「お俊じやないか、傳兵衛さん、よう逢ひに來て下さんした、と云ふ聲寢耳に與次郎が、惚り起ると明くる門の口、妹が姿もくら紛れ、とら

へる袖のふりあはせ、お俊と心得傳兵衛を、無理に引込取違へ、戸口の内からびつしやり引立て「そりやこそつれに來をつたぞ、お俊必ず外へ出まいぞや、戸口はおれが押へて居る。ヤア門に居るは傳兵衛ぢや、おのれを入れてよいものかと、いふもかた〳〵胴ぶるひ「コレナア兄様わしや、表に居るわいな、何ぢや表に居るわいなブ、ヤア其聲色措いてくれ　そんな事食ふおれぢやないわい、母者人、母者人、傳兵衛がお俊を殺しに來た故、今表へたて出した。おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され、加勢〳〵〳〵とうろ〳〵〳〵、うろたへ騒ぎ母親も、何ぢや〳〵〳〵傳兵衛の加勢、ム、まだ外に同類でもあるのかと、探り寄つたる傳兵衛が傍へコレ〳〵お俊、顫る事ばない、兄や母が付いて居る、マア氣を鎭みやと撫でさする、背の手ざはり合點行かず「コレ〳〵與次郎、どうやらこりや娘ではない様なわいのヤアくらがり紛れに材木が紛れ込みやせぬかや、こなたつかまへて居て下されやと、探る手先に火打箱、がち〳〵ふるう附木の光、シヤ　コリヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや、お袋、兄御、エヽ面目もない此姿と、猶も小隅に屈み居る。コリヤヤリコリヤ其様にしぼ〳〵として見せて、おいらを欺して　お俊を突うとするのか、其手はくはぬと、懐より一通取出し、こは〴〵ながら傍へ寄り、コリヤ〳〵傳兵衛、お俊とわれと手が切れぬと、科人のわれじやによつて、妹迄難儀する、それでさつきに妹に得心さして、どき狀を書かしてあれば、コレこれを見い、これじやによつて、モウ〳〵〳〵お俊が方に殘心氣は離れてあるわい、ムヽスリヤお俊が其退狀を、サアどき狀ぢや、エヽ其心とは知らず云ひかはした、詞を誠と思ふて、迷ふて來たが無念なわい、口惜いと齒を喰しばる男泣、恨を聞くも隔たる戸口、心はさうじやないじやくり「オオ嘸腹が立う道理ぢや〳〵、マアマアとつくりと氣を鎭めて、退狀を見て下さんせいなア、オヽそれでよい、長う物いやんな肩が出

るぞ屑が、コリヤヤイ〳〵傳兵衞おれが讀んで聞かしたうてもな、皆目おれはナニアノソレオ、祐筆じやわい、サア〳〵早うと封じめ切り、突付られて目に溜る、涙を拂ひ、ナニ書置の事、ヤア何ぢや書置ぢや。コレ〳〵兄正直な、悔りする事はないわいの、そなたは無筆わしは盲、書置ぢやと讀違へうろたへさして門口へ出で、娘を存分にせうとのたくみ、ハ……そんな嘘は喰ませぬ、サア〳〵まんまに讀ましやれ〳〵、コレ〳〵與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや、オヽ呑込んで居る、爰にはおれが、へゝへばり付いて居るわい、サア〳〵早う讀めやい、ものこそよう書かね、聞く事は祐、ヤナニ無筆ぢやないわい、サア讀だ〳〵。エ誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へがたき親の御恩、殊更不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤を遁れ、世を樂に過させまし候はア、せめて少しの御恩報じ孝行の片はしにもなり候はんと、それのみ朝夕祈參らせ候處〳〵、一世迄と云ひ交し參らせ候、傳兵衞樣、思はぬ此度の御身の難も、根を尋ねば皆われ故に候へば、今さら見捨て候ては、女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、俱に覺悟を極め參らせ候、オヽ母者人、どうやら風がかはつて來た樣な、サイノウわしも胸がどき〳〵と、サア其跡をちやつと讀んで下され〳〵、エ俱に覺悟を極め參らせ候、先程傳兵衞樣へ退狀と申して認めしは此事申上度きまゝ退狀と僞り書き殘し參らせ候、何事も〳〵前世よりの定り事と、御諦め下され候、申上げたき數々は筆にもつくしがたく候へ共、心せくまゝ申入れ參らせ候、オヽ〳〵さてはさうした心かと驚く傳兵衞、親子はうろうろ、エ、氣づかひな、コレ兄や娘を家へ、早う〳〵と母があせれば與次郎も、戸口明ければ走りよる妹を無理に四人が、顏見合して溜息の、涙はさらにわかちなく、何と詞も傳兵衞、泣く目を拭ひ、一旦いひかはした詞を立て、俱に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節、忘れはせぬ嬉しい

ぞや、思ひ廻せば廻す程、我こそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、倶に死んではお二人の歎き、命ながらへなき跡の、といふを頼むぞと、詞にわつと泣き出し、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、お詞無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末の末迄云ひかはし、互に胸を明しあひ、何の遠慮も内證の、世話しられても恩にきぬ、ほんの夫女と思ふ物、大事の〳〵夫の難儀、命の際にふり捨て、女の道が立つ物か、不孝共悪人共、思ひあきらめコレ申し一所に死なして下さんせと、隱せし剃刀取直す　マ……まて待おれやい〳〵〳〵、コリヤやい、これで死ぬると命がないぞよ、コリヤまあ何の事ぢや、とんと分らん様になつてきたわい、殺しに來たと思ふた傳兵衛殿より、今ではわれの方が手強うなつたぞよ、コリヤマアどうしたらよからうぞと、云ふもおろ〳〵母親も、オ、さうぢや〳〵、我が子が可愛〳〵と、子故の闇に脇ひと見ず、これまでおしゆんがお世話になつた、恩も義理も辨へず、一圖に中を引分けうと思ふた母は義理知らず、賤しい勤する身でも、女の道を立て通す、娘の手前面目ない。そなたの心に恥入つて、何事もいひませぬ。傳兵衛様と一所にの、コレ死出の道連れしやいのう、したがこれ申し傳兵衛様、定めて親御様達もござりませうが、親の心と云ふ物は、人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも　子の可愛さにかはりはないもの、おしゆん傳兵衛と云はす氣か、もしやお前が死なしやつたと、親御様が聞かしやつたら、悲しうて〳〵此世に殘つて居る氣はあるまい。何國いかなる國の果山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ、娘が心に恥入つて天にも地にもかけがへない、可愛我子を心中に、合點してやる親心爰の道理を聞分けて、コレ拜みます頼みますと、手を合はしたる母親の、子故に迷ふ闇の闇、二人は何と詞さへ、涙に涙結ぼるゝ、血筋のわかれ與次郎も涙の雨の古布子、袖喰ひしばりしやくり泣き、ア、傳兵衛様の泣しやるも道理ぢや〳〵、道理々々と云ふて居てはねつからはつからいつ迄も分らぬ道理ずや、コレ傳兵衛様、母者人

が今の詞、御合點が參りましたか、エコリヤ我も得心してくれたか、合點がいたか、得心してくれたか、合點がいたか、サ、、、、合點したらばどうぞ此場を、立退く分別併し其形では人目に立ち、京の町を放れる迄、此編笠で顔をかくし、幸ひの猿廻し、まめで二人が末長う、目出度う女夫になりとげる、門出の祝ひに此與次郎が、お初徳兵衛が祝言の壽、此方衆も生別れの盃、イヤイヤ祝言の盃と祝ふて諷ふも聲ひくに、有田ウタお猿はめでたやな、ヒヤウシ聟入姿ものつしりと〳〵、コレ去りとは〳〵ノウあろかいな、さんな又あろかいな、オ、徳兵衛様ござんせ、餘りこな様が來やうが遲いによつて、お初様は顔眞赤にして、腹立て居やんすわいのう、コレお初様聟様が盃をしたいといのう、機嫌直して盃を戴かんせ、コレコレ〳〵いたどくノウ盃を、さんな又あろかいな、ヤコレコレコレ聟様、足で盃をさすはあんまりつれない、それでは嫁御様が戴かんせぬわいのう、ひぞらすとほんまにさしてやらんせ、さうぢや〳〵〳〵そこでお初がいたどいた物ぢや、コレいたどくのう盃をさんな又あろかいな、ヒヤウシコレ嫁御の晝寢もころりとせい〳〵ナコレエあろかいな、さんな又あろかいな、コレ〳〵聟様、餘りつれなうさんすによつて、おしゆんヤアノ何嫁御様が起さんせぬわいの、そこらでちよいと起したり起したり、コリヤ、コリヤイ、コリヤ、さりとは〳〵ノウあろかいな、さんな又あろかいな、ヒヤウシ起たら互ひに抱付きやれ、オ、それで、機嫌が直つたぞ、エ、、、、あろかいな、さんな又あろかいな、くるりと返つて立たりな、立てくれ、コレ〳〵〳〵立しやませ、序でに日和を見てたもれ、ア、よい女房ぢやに〳〵ノウあろかいな、さんな又あろかいな、ヒヤウシ日和を見たらば落ちてたも〳〵、クヽさうぢや〳〵〳〵、お猿は目出たや目出たやな、サ、、、、きり〳〵此家を猿廻し、まさる目出たう何時迄も、命まつたう仕てたもと、目は見えねども見送る母、詞も此世で聞き納め、心の内の暇乞ひ、明日の噂と形ふりも、やつす姿の女夫づれ、名を繪草紙に聖護院、森をあてどにだどり行く。



道行初音の旅路

静御前	豊竹駒太夫
忠信	竹本相生太夫
	豊竹辰太夫
	竹本播路太夫
	豊竹宮太夫
	竹本津の子太夫
	豊竹駒司太夫

道行初音の旅路

『道行初音の旅路』は、『義經千本櫻』の四段目の口で、前に御覽に入れました『鮓屋』の次に當ります。

序でに申上げますと、『義經千本櫻』は初段が大内の段、二段目口が稲荷の森で段切は渡海屋銀平の内から大物浦、三段目の口が椎木で切が鮓屋の段、四段目の口が道行初音の旅路で切が川連法眼館の狐忠信の段、五段目が吉野の花矢倉といふ五段續きの淨瑠璃で有りまして、中でも重い役は知盛と權太と忠信だと云はれて居ります、その忠信の活躍する件です。

◇床本

〈戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや忠とまての武士に君が情とあづけられ、いかに忍ぶ都をば後に見捨てゝたびだちて、つくらぬなりも義經の御行末はなにはづのなみにゆられてたゞよひて今はよしのと人づてのうはさの道のしほりにて大和路さしてしたひゆく。見わたせばよもの梢もほころびて梅がへうたふうたひめのさとの男が聲々にわがつまがてんじやうぬけてすえるぜん、ひるのまくらはつがもなや、天じようぬけてすへるぜん、ひるのまくらはつがもなや、ヲヽつがも

竹澤團六　なや、おかしからすの一ふしに人も、わらやのそだちにも春ははねつくてまり、ひいふうつくづくときけばこち風音そへて、こぞの氷を德若に御萬歲と君もさかへます。おいけふありや、たのもしやさぞなやまとの人ならば御かくれがをいざ問はん、はれも初音の此つゞみ君のさかへを壽きて、むかしを今になすよしもがな、うぐひすもはつねのつゞみ〳〵しらべあやなす音につれてつれてまねくさおくればせなる忠信が旅すがた、せなに風呂敷をしかとせたらおふて野みち、あぜみちゆらり〳〵かるい取なりいそいそとめだゞぬ樣に道距て、女中の足とあなどつて

野澤吉左　嫵お待かね、こゝ幸ひの人目なしとせいめいそへて賜はりし御きせながを取出し、きみと敬ひ奉る。

竹澤團二郎　靜はつゞみを御顏とよそへて上におきの石、人こそ知らぬ西國へ御げこうの御かいじよう、浪風あらく御船を住吉浦に吹上られ夫よりよしのにまします由、やがてぞ參り候はんと互ひにかたみをとり納め、鳩とつばめはどちらが可愛、ややを育つるつばめが可愛い、花を見すてるかりがねならば、ふみの便りも又の緣、エ、そふじやいな〳〵、唱ふ聲々面白や實に此鎧を賜はりしも兄繼信が忠勤也誠にそれよ越方の思ひぞ出る檀の浦の海に兵船平家の赤旗陸に白旗源氏の

鶴澤道造

豐澤新太郎

豐澤廣二

鶴澤猿一郎

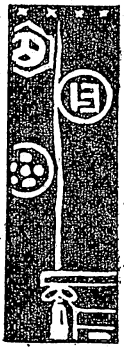
豐澤廣助

人形

静御前　桐竹紋十郎

忠信　吉田玉松

強者ナラ物々しやと夕日影に長刀を引そばめ、某は平家の侍悪七兵衛景清と名乗かけ〳〵なぎ立て〳〵なぎ立つれば花にあらしのちり〳〵ばつと木の葉武者言ひがいなし出や方々よ三保の谷の四郎是にありと渚に丁ど打つてかゝる刀を拂ふ長刀のゑならぬ振舞何れ共勝り劣りも波の音。打合太刀の鍔元より折て引汐歸るなり、勝負の花を見捨つるかと長刀小脇にかい込で兜のしころを引摑み後へ引くあしよろ〳〵向ふへ行足たぢ〴〵〴〵むんづとしころを引切て双方尻居にどつかと座す腕の強さと言ひければ首の骨こそ強けれとハハヽヽホヽヽヽ笑ひし後は入亂れ手しけきはたらき兄繼信君の御馬の矢表に駒をかけすへ立ふさがるオヽ聞及ぶ其時に平家の方には名高き強弓能登の守教經と名乗もあへずよつぴいて放つ矢さきはうらめしや兄繼信が胸板にたまりもあへず眞逆様あへなき最期は武士の忠臣義士の名を殘す思ひ出るも涙にて袖はかはかぬつゝ井筒いつか御身ものびやかに春の柳生の糸ながく枝をつらぬる御ちぎりなどかはくちをしかるべきとたがひにいさめいさめられ急ぐとすれどはかどらぬ芦原峠けうのさと、つちだしつたも遠からぬのぢの春風吹はらひくもと見まがふ三芳野の麓の里にぞつきにける。



文樂の人形淨瑠璃

古朱亭

文樂座は現在日本で唯一の職業的人形芝居の一座で有りまして、淡路の人植村文樂軒の創始にかゝります。文樂座といふ名乘を上げたのは明治五年一月ですが、其發祥は遙かに古く、寛政の末に彼文樂軒が淡路より上阪し、道頓堀の東、高津橋南詰西の濱側に「高津新地の席」として人形淨瑠璃を興行したのが始めで有ります。其後幾變遷を經ましたが植村家四代の經營、續いて現在の松竹に依る經營に至るまで其間凡そ百數十年古典藝術の精粹として唯一の傳統を誇り來つたもの、見樣に依つては貴重な「文化の記念塔」とも申せませう。

人形淨瑠璃の特色は、淨瑠璃と三味線と人形との三者が渾然として一體を成すところの妙味です。太夫でも三味線でも、また人形遣ひでも、有名な人々は盡く斯道で子供の折から、私共の想像も許さない樣な苦しい修行を續けて來た人々ばかりで有ります。それでも、名を成し藝の或段階にまで達した人は餘程の好運兒で、殘る大多數の人達は苦業何十年にして尙床のかげに埋もれて居る有樣と聞いては、如何に此の世界が比類なく嶮岨な、また不思議な魅力を有つた一種の仙境であるかと云ふことを痛切に感じさせられるでは有りませんか。其一例を人形遣にとつて見ますと、人形遣ひは遲くとも十二三歲から猛修業をしなければものになりません。で、始めは人形遣の後に居て舞臺の小道具を乘せる所謂蓮臺の置所、小道具の出入れ、柝の打ち方、淨瑠璃の文句の暗誦、人形の仕草、これだけの事を先づ修業します。此間が早くても三年、次に足遣ひが三年、左遣ひが三年と順序をへ

て漸く人形遣ひとして一人前の駈出しになるのです。其間の難業苦業、現代の人間には到底忍びがたいものださうで、文樂でも最近十年ばかり人形遣ひの弟子入がない、といふ事で有ります。

序でに人形の事を少し申上げて見ますと、文樂の人形は御存知の如く三人で遣ふことになつて居りまして、先づ主たる遣手が左手を人形の背中から胴に差込んで大體の位置を定め、同時に右手を以て人形の右手を動かします。別に左遣ひといふのが人形の左手をつかひ、又別に足遣ひといふのが、人形の足だけを持つて動かします。つまり、三人の神經が一つの人形に集中される譯で、それには其人形の頭が中樞となり、主たる遣手は人形の背中から、左遣ひは左から、足遣ひは下の方から、それぞれ心を配つて人形の動きに統一を與へるので有ります。これは永年の練磨で遣手三人の意氣がピッタリと合はなければ到底出來ることではありません。次に人形で最も重んじられて居る頭の種類は、大體を左に記しますと——

文七——光秀、五右衛門、熊谷等に用ふ

孔明——由良之助、菅相丞等に用ふ

檢非違使——判官、久吉、梅王等に用ふ

團七——宗任、權太、團七等に用ふ

源太——十次郎、三浦之助、義經等に用ふ

若男——勝賴、忠兵衛等に用ふ

金時——春藤玄蕃、杉王等に用ふ

景清——景清一役だけに用ふ

舅——師直、梶原等に用ふ

陀羅助——端敵に用ふ

ふけをやま——操、相模、千代等に用ふ

娘——八重、初菊、時姫等に用ふ

新造——阿古屋、夕霧、宮城野等に用ふ

婆——あたま（かつら）だけと

りかへて夫々の役に用ふ

つめ――仕出しの役（一人遣ひ）に用ふ

人形のことは毎日扱つて居る其道の玄人でもハッキリとは分らないといふ程のもので、以上も大體の分類に過ぎません。元々文樂の人形は淡路系統のもので、それが長年月の間に都會的に洗練されて纖細に複雜にと發達したので有りますが、其起原は相當に古いもので、俗に云ふ傀儡舞し、即ち人形舞しの祖と云はれて居ります攝州は西の宮の百太夫が傀儡を踊らせながら淡路の三條村邊へ行き、その村の木偶師菊太夫なる人の娘と通じて男子を生み、其子が菊太夫の家をついで木偶師として續き、後の淡路の人形國を作つた、と云ふ傳說が殘つて居るのです。爾來人形の歷史四百年、名匠の苦心と時代の彫琢を經て鄉土色ゆたかな人形淨瑠璃が完成される迄の經路には幾多の逸話や物語を止めたのですが、其中の著しい事件として、久しい間の「一人遣ひ時代」の後に享保十九年十月竹本座上場の「蘆屋道滿大內鑑」で始めて三人遣ひが行はれた。それが今日の「吉田」姓の元祖に當る吉田文三郎の工風に依つて始められたことだけを申上げるに止めて置きませう。

なほ、文樂の舞臺で普通の芝居と異つて居る一特色は勾欄で有ります。これは古來、人形芝居の舞臺の中心となつて居りますもので昔――創始時代には此の勾欄が高くて、人形遣ひも淨瑠璃も三味線も勾欄の裏にあり、見物は勾欄の上に差出された人形の動作だけを見て居たのですが、其勾欄が段々低くなつて、寶永二年十一月には名手辰松八郎兵衞が「用明天皇職人鑑」の鐘入の段に勾欄の前方へ出て人形を遣ひました。これが出遣ひ出語りの始めで、彼の至藝と當時の人形の人氣とを知る事が出來ます。其折の出遣ひとは意味が違ひますけれども、今日でも屢々

出遣ひは行はれまして、華々しい色上下を付けた人形遣ひが客の前で人形を遣ふことは珍しく有りません。從つて勾欄も低くなり、現在の定石としては勾欄の高さは舞臺より一尺五寸、船底から二尺八寸、即ち人形遣の腰から下だけを隠す高さで有ります。船底と申しますのは、人形の舞臺は奥七分が普通の舞臺面で此處に屋臺を飾り、此の屋臺の前が約一尺二三寸落ちて居ります、これを船底と云ふのです。斯う云ふ風に、人形芝居の舞臺は此の勾欄といふものを地上の一線とする、これが地面であり往來で有りまして、人形は此の線上で夢幻的な生活を營むのです。ですから、現實的に見れば人形は宙に浮いて居ります譯で、一見荒唐な樣にも感じられますが、巧みに錯覺を利用した人形遣ひの魔力は、寫實的平面的な舞臺よりも遙かに切實な『陶醉の世界』を描き出す事が出來るのです。

全く、人形の世界は現實をはなれた陶醉の世界です。迫力のある淨瑠璃の聲音、魂をうづかせる樣な三味線の音色、聽覺の不思議な繪模樣に魅された神經が、同時にあの「人生の縮圖」にも似た人形の舞臺に接して、無表情の表情無生命の生命が躍動する現實以上の現實を目のあたり見る時の妖しき感銘は、到底他の藝術では得られない醍醐味で有ります。現代の樣な忙しい世の中に生きる吾々が斯くも奥深い藝術を持つといふ事は、たゞ魂の安息を求める外にもつと深い意義が有ると考へてはならないものでせうか。人形の世界が吾々の生活に遠い事は確かに事實です。けれども、其はまた吾々にとつて實に身近いものとも申せます。外形こそ違へ、あの世界の感情は吾々の胸の底に、民族の法燈として燃えて居るのです。由良之助でも松王でも重忠でも高綱でも、またお三輪でも八重垣姫でも靜御前でも、さては伊左衛門、國七、權太、與次郎、お弓、小春にしても、あれはみんな私共の

祖先の、引いては私達自身の、氣持の一端を取出して衣裝を着せて踊らせた姿ではないでせうか。白々とした眞晝の靜寂の中に、また黄昏のうつゝともなき物思ひの間に、人は忘れて居るその昔の追憶をふと思ひ起すものだと聞いて居ります。その印象の鮮かさ、美しさ、如何なる混濁も、如何なる醜惡も、時の流れに洗はれて跡を止めず、心を打つのはたゞ清く麗しい詠嘆の浪ばかりで有りませう。文樂の魅力はそれと同じ清らかさ麗しさで、演ずる者が心なき人形であればこそ、淨化された『永遠の感情』が舞臺にみなぎります。また其感情が現世を超えた美しさであればこそ、吾々鑑賞者をして或時は舞臺と無限の距離を感ぜしめ或時は脈々たる血の親しみをさへ感ぜしめるのだと思ひます。

この事は歌舞伎と比べて見ると非常に興味の深い事で有ります。歌舞伎の魅力は其本質に於て人間の魅力ですが、人形芝居では飽までも淨瑠璃本位で其效果は嚴然たる太夫、三味線、人形遣ひの三位一體に立つて居ります。歌舞伎では生きた人間の動きを中心とするに反し、これは自由な配列に置かれた人形を驅使するのですから、舞臺に絶對的な統整が保たれて居ります。例へば主役になるべき人行は他のワキ役より大きく精巧に出來て居り、且其動くべき地位も勾欄の中心にありますなど、舞臺效果の純粹で力强いことは誠に驚くべきもので有ります。而も今日に於ては、歌舞伎と比較にならない程さびしい城に立籠つて「藝」といふものに宗教的な執着を持續け、人形の神祕な微笑のみを見つめながら孜々と勵む人達、それは修道院の淸僧を思はせる殉情です。

その愛すべく尊ぶべき雰圍氣、美しい藝の陶醉境、古典藝術の滋い色彩、吾々は襟を正しながらも寛いだ溫い氣持で、懷しい舞臺に見入らうでは有りませんか。

觀賞おぼへ

昭和九年十二月　日

重の井子別れに就いて		
	さくら時雨に就いて	
義經千本櫻に就いて		

		備考
堀川に就いて		
道行初音の旅路に就いて		

御客樣方へ特に御願ひ

◇お場席へ御携帶品をお置きのまゝお立ちになりますと紛失の恐れが御座いますから、何卒お持ちになるか或は御携帶品預り所へお預け下さるやうお願ひ致します。

◇お履物はなるべくお靴かお草履が御便利です下足預り所が混雜致しますので。

御願ひ

開場毎に一方ならぬ御愛顧を蒙りまして深く御禮申上げます。
當座は不絶皆様に對し

親切は吾等の出發點
誠實は吾等の生命線

の意味で一生懸命努力致して居りますが凡てに不行屈勝で御座いまして誠に申譯も御座いません。特に食堂賣店でも十二分の注意を拂つて居りますが何事によらず更に御氣附の點は御遠慮なく私迄御注意下さいますれば一層有難う存じます。隨つて御教示に基き改善の實をあげて行きたいと思ひます。

劇場御使用に就て……月末又は休演の時、劇場を御浚ひ又は各種の御催し物に御使用の際は規定使用料の外祝儀心附等一切申受くる事を次の如く嚴禁致しましたから何卒御懸念なく精々御利用願ひます。

一、劇場御使用の場合は直接當該劇場營業主任に御相談願ひます。
一、使用料以外の諸雜費は主任より御請求申上げました外は一切御支拂なき樣に願上げます。
一、祝儀の有無により舞臺上又は樂屋内其他に對し不行屈等絶對無之事と御承知願上げます。

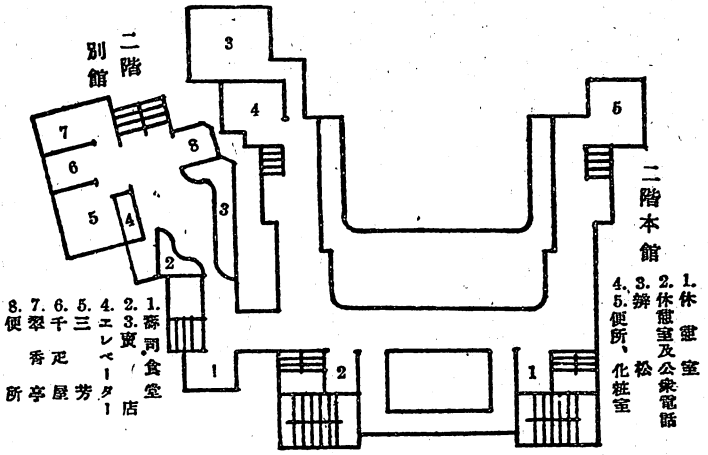
食堂賣店其他……に就いては本繪本中數頁に亘りお客樣の御便宜の爲め食堂賣店其他注意事項等が御座いますから是非御覽置き願ひます。

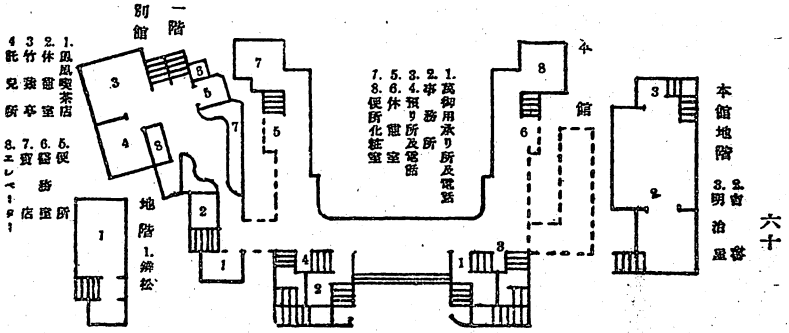
當日御觀劇の方……でも好いお場席の用意が致して御座いますが、最も重寶な前賣の御利用が一層御便利と存じます。

歌舞伎座營業主任
鈴木十郎

各食堂喫茶店定價表

本館 地下室	別館 地下室 本館 二階	別館 三階	別館 二階	別館 三階	別館 二階
御定食 四品 一圓冊錢	御辨當 一圓 一圓冊錢 膳 一圓五十錢	御定食 一圓冊錢 歌舞伎 ランチ 八十錢	竹。三品 一圓 松。五品 一圓五十錢 特。六品 二圓	御同 一圓冊錢 御辨當 金ぶら 一圓冊錢 親子飯 七十錢	御辨當 一圓 一圓冊錢
吉喜 和食堂	辨松 和食堂	歌舞伎 洋食堂 西洋料理	翠香亭 支那料理	三芳 和食堂	
別館 二階	別館 地下室	別館 一階	別館 一階	別館 二階	
壽司 五十錢 ちらし壽司 五十錢	更科そば 十五錢 天ぷらそば 十四錢 おかめ 十二錢 花巻 十二錢 し難 十五錢 る こ 十五錢 み つ 豆煮 十二錢	上蒲焼 二圓 並蒲焼 一圓廿錢 上並 丼一圓 並丼 七十錢	コーヒー 十錢 紅茶 十錢 ソーダ水 十五錢 クリーム 二十錢	コーヒー 十錢 紅茶 十錢 ソーダ水 十五錢 クリーム 二十錢 フルーツアイス 二十錢	
壽司 食堂	更科 食そば堂	竹葉亭 饅食堂	風風 喫茶店	千疋屋 喫茶店	
別館 三階	本館 三階	本館 地下室	本館 三階	別館 三階	
天丼 親子丼 冷麥 五十錢 二十五錢	ぞうに 二十五錢 しるこ 十五錢 クリーム 二十錢 ソーダ水 十五錢	天ぷらそば 四十錢 鴨南ばん 三十五錢 ざるそば 十五錢	コーヒー 十錢 紅茶 十錢 ソーダ水 十五錢 クリーム 二十錢	天ぷら 一圓五十錢 おてん 八十錢	
天井 親子 食堂	田、毎 しるこ	歌舞伎 そば	明治屋 喫茶店	天ぷら おてん 立食堂	


二階
別館
1.寿司食堂
2.寅
3.店
4.エレベーター
5.三芳
6.千足屋
7.翠亭
8.便所
二階本館
1.休憩室
2.休憩室及公衆電話
3.辨松
4.5.便所、化粧室


一階
別館
1.風月堂茶店
2.休憩室
3.竹葉亭
4.託兒所
5.便所
6.休憩室
7.寅店
8.エレベーター
地階
1.辨松
1.萬御用承り所及電話
2.事務所
3.4.預り所及電話
5.6.休憩室
7.8.便所化粧室
本館
本館地階
2.貴賓
3.明治屋

食堂売店御案内

四階別館

1. 寫眞撮影室
2. 日本間
3. 休憩室
4. 大食堂
5. 便所

四階本館

1. 便所
2. 便所
3. 休憩室

三階別館

1. 天ぷら食堂
2. 天丼、親子丼食堂
3. 他物場
4. 洋食堂
5.
6. エレベーター
7. 便所
8. 賣店
9.

三階本館

1. 鮒松
2. 大休憩室
3. 預り所及電話
4. 田毎
5. 湯呑所
6. 賣
7. そばや
8. 直營喫茶所
9. 便所
10. 便所

最も效果的に
個性美を現す

お化粧の氣持

お化粧は婦人に必要な身嗜みでもあり、また誰方でもなさつてゐる事で御座いますが、さて之を旨く、效果的に致す段になると仲々むづかしいもので御座います。それに、春はボヤケル、夏は日焦けや化粧崩れ、また冬は肌膚が荒れる、と申すやうな譯で、我ながら氣に入る程のお化粧が出來る事は滅多に御座いませんのです。

お化粧といふものは第一が慣れですから、御自分のお顏や姿の特徴をよく見定めて置いて、其れが最も美しく見える樣に、白粉の塗り方、紅のさし方、眉や生際のかたちまで種々と工夫を致します。ア、もして見る、コウもして見る、其中に自然とコツが分つて來る樣な次第で、御自分の工夫と慣れをオロソカになさつては、いくら新しい美容法やハイカラな化粧品をお求めになつても結局はムダになるのではないでせうか。人間の顏立ちは一人々々ちがひますから、御自分だけに適ふお化粧法や何か、御自分でお考へになるのが本當だと思ひます。

それに又、お化粧といふ事に就いては、自分を美しく見せるのが本來の目的なんですから、全體の調和を考へなければ嘘だと思ふのですたゞ顏へ白粉を塗つたから、其れでいゝといふものではない、また美くしい柄の着物を着たらば必つとよく見えると定つた譯でもない、要する所は顏も姿も美しくて、而も全體として整つて居なくては本當に結構なお化粧とは謂はない。さう云ふ道理ですから、白粉を一刷毛塗るのにも、半襟一つ選ぶにも、其の場合々々に調和し

た美しさを考へて掛かる事が必要で、餘り部分々々のことに熱中して了ひますと、一所ばかり美しくても傍から見て案外よくない事が多いものです。其處のとこのコツは實に微妙なので、各人の頭の働きに依る外は有りません。着物でも高價な物なら必ず良いとは云へない、餘りお金をかけなくてもキチンと整つた身裝は出來ます。顏のお化粧にしても無闇に高價な佛蘭西や何かの化粧品を用はないと何だか頼りないと云ふ樣なお孃樣や奥樣もゐらつしやると思ひますが、其れは、お用ひになるのは結構ですが、其れよりはもつと手輕に求められる國產の優秀品で立派なお化粧が出來るのですから其方が合理的だと思ひます。大體、白粉ッてものは外國より日本の方が進んで居りまして、歷史も古ければ研究も屆いてる、たゞ昔のものは鉛毒といふ大缺點があつたから用へないのですが、今ではサーワ白粉なんて純無鉛で美粧效果の素晴しい製品が出來てゐる時代です此のサーワ白粉ですと、第一時間が掛からず要量も極少量で濟む、これは分子が非常に細いからで、一邊でよく伸びますし、又二度塗三度塗をしてもムラにならず誠にスラ〳〵と美しいお化粧上りになるのです。サーワを付けて居りますと白粉を付けたといふ重苦しさが、見た目にも感じにも全然御座いませんほど誰方の肌膚にもピッタリと適ひ、從つてお化粧保ちも無類です。誰方の經驗を伺つても恐しくツキがいゝ、そして永保ちする。それに化粧上りが自然で生々してゐて申分ありませんと仰有る、誰方がお付けになつても間違ひのない白粉です。斯う云ふ重寶な白粉を用ひて、前にも申上げた樣な、全體の調和といふ點に神經を働かしたならば、其れはもう實に寸分のスキもない、お顏なり姿なりが出來上るに定つてゐます。

序でながら、お寒さの間は肌が荒れがちです。何と云つても、地肌がお化粧の基ですから、其お手

入も隨分大切ですが、石鹸の粗惡なものを常用すると後肌に石鹸分を殘したり、また大切な肌を荒したり、必ずお化粧に惡い影響を與へます。何でも信用のある高級品（例へばミツワ石鹸の樣なもの）を選んでお用ひになることが何よりも安全で、且お化粧成功のコツで御座います。

地肌の荒れるのを恐れる餘り、お化粧落しにはコールドクリームばかりをお用ひの方も有りますが普通は肌荒れの恐れのない石鹸を用ふのが一番よろしい樣で、何と申してもミツワ石鹸の樣な石鹸を用ひサツパリと洗流さなくては心から清爽な氣持になれません。なほ、此ミツワ石鹸を常用して居りますと、白粉ノリが全くよくなるのは不思議な程で御座います。コールドクリームも勿論結構なもので、殊にサーワのなどは最も信用のある純質のクリームですから、優良な品質の石鹸を用つて洗顔や入浴をした後、サーワのコールドクリームを兩掌へ充分に擦伸して顏や襟へ叮嚀に擦込んで拭いて置きますと、荒れを防ぐのに大層效果があり、從つてお化粧をなさるにも誠に樂で御座います。

なほ、クリームと申せば此のコールドクリームの他に、ヴァニシングクリームが盛んに用ひられ、殊にお若い方々にはサーワのヴァニシングの上へ好みの色味のサーワ粉白粉をお刷きになる方法が最も流行のやうで御座います。更にサーワの製品としてはクリーム白粉といふ、一つ品でクリームと白粉、兩方の作用を有つてゐる重寶な化粧品が御座います。

サーワの固煉色味（白・肌）二種、水と粉白粉色味（白・肌・新肌・濃肌）各四種づつ、他にヴァニシング・クリームとクリーム白粉以上十二種何れも携帶用小器入一揃ひ、劇場名記入、郵便切手五十錢封入、東京市日本橋區兩國ミツワ石鹸本舗丸見屋商店へお申越次第早速郵送致します。

御歳暮

御時節柄
特に好適な御贈答品は是

◎ミツワ石鹸

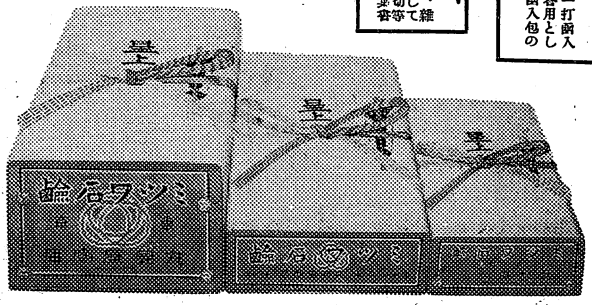
御贈答季節には毎度、御用命を賜はり添けなく御禮を申上げます。當年も亦、御歳暮又は年始の御進物として、不相變御利用の程を希上げます。

ミツワ石鹸
サーワ白粉

發賣元　東京　◎丸見屋商店

◎ミツワ石鹸
徳用大形は、三個函入、半打函入、一打函入の三種がございます。從つて、御贈答用としては三箇函入包、半打函入包、一打函入包の各種があります。

◎ミツワ石鹸は、
何處の小間物化粧品店、雜貨店等でも特に勉強して販賣致しますが、萬一御近所で賣切等なりで御一報を賜ひます。お歳暮の節は本紙へお電話なり、お歳暮



金五十錢見當の　金壹圓見當の　金貳圓見當の
（徳用大形三箇函入包・半打函入包・一打函入包縮寫圖）

歌舞伎座名物觀劇會

ミツワ會

◎ミツワ會當日いづれにても觀劇券お求めの上御來場の方はミツワ會員として各等級に應じて洩なく其他香粧品各種を組合せて夫々呈上

◎ミツワ石鹸

歌舞伎座の年興行には、歌舞伎座名物のミツワ會の見物が催されます。詳細は其都度各新聞紙上へミツワ會觀劇日、狂言、出勤、俳優、觀劇料等を廣告してお知らせ申上げます。ミツワ會で御見物の旨をお早くお申込みになれば、確實に良い御座席が取れ、お一人樣でも便宜に御取り計らい申しますから、豫めお申込みの上御見物が御便利で御座います。

主催　ミツワ石鹸本舗　◎丸見屋商店

日本橋區兩國

電話浪花(66)三〇番・三一番・三二番・三三番・三四番・三五番・三六番・三七番

▽　どうすれば皆様方に十分御満足して頂ける
かと當劇場はいつも心配致して居ります。　△

○今日はようこそお越し下さいまして厚くお禮申上げます。
○けふ一日のお慰みの間に何かお心づきの點や行き屆かぬことはございませんでしたでせうか。
○當劇場は總て皆様本位に出來る限りお心持のよいお慰み場所に致したいと常々心配致して居りますからこうして欲しいとお思ひになりましたことは何事によらずどうぞ御遠慮なく左にお書き入れの上備付けの投書箱にお入れを願ひます。
○お敎へに預りましたことを實施致します時は何らかの形でお禮の御挨拶を申上げたいと思ひますからなるべくお所とお名前をお書き添へいたゞきたいと存じます。

お　所

お名前

昭和九年十二月十九日印刷
昭和九年十二月二十一日發行

東京市本郷區駒込富士前町四十三
編輯兼發行人　藤田篤

東京市京橋區銀座三丁目四
印刷者　佐藤保太郎

東京市京橋區銀座三丁目四
印刷所　株式會社文祥堂

豊田書房
(3261) 1589

本邦唯一　内容公開

ミツワ家庭藥

みつわ・かていくすり

効力最も顯著なる藥三十二方を揃ふ

理學博士藥學士　小平勳氏監督製劑

製劑監督　理學博士藥學士　小平勳氏

劃時代的の

一、三十二方總て其内容を公開す
一、處方的確にして奏效顯著なり
一、製劑精確にして效力一定不變なり
一、藥品純良にして中毒の危險無し
一、容器完全にして變質の虞無し
一、内服藥は錠劑にして服用し易し
一、價格低廉にして長く保存に耐ふ

家庭藥です

説明小冊子御申越次第送呈

全國の藥舗にあり　◎ミツワ家庭藥の種類　若し無き時は本舗へ

ミツワ健胃錠	ミツワ胃腸散	ミツワ消化錠	ミツワ制酸錠	ミツワ緩下錠	ミツワ止瀉錠	ミツワ清腸錠	ミツワ驅蟲錠	ミツワ清涼劑	ミツワ解熱錠	ミツワ鎮咳錠	ミツワミューズ	ミツワ人參錠	ミツワ婦人湯藥
ミツワプレトロピン	ミツワリノセニン	ミツワ點眼液	ミツワ鼻病液	ミツワ齒痛液	ミツワ含嗽錠	ミツワ鎭痛藥	ミツワ蟯蟲液	ミツワ養毛液	ミツワ腋臭藥	ミツワ撒布藥	ミツワ軟膏	ミツワ制痒膏	ミツワ頑癬膏
ミツワ鎭靜錠	ミツワ婦人坐藥	ミツワ痔の坐藥	ミツワ雪の雫										

◎ミツワ石鹼本舗　東京　丸見屋商店藥品部

ミツワ各種製品にして　萬一御近所の取次店に品切れ等の節は　東京・兩國の本舗（電話浪花(67)三〇番か二一二一番）へお電話かお葉書にて御注文次第、假令一壜一箇にても　市内は早速配達御供給申上ます

ミツワ石鹸
サーワ白粉
純良無鉛
ミツワ白粉
固煉製
Mitsuwa Soap
ミツワ石鹸
商標
登録
ミツワ石鹸